

---

# UBK ~ 最速に惚れた男達 ~ 125ccへの道

夜桜 冬樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

UBK〜最速に惚れた男達〜 125ccへの道

### 【Nコード】

N4280Q

### 【作者名】

夜桜 冬樹

### 【あらすじ】

Ultimate Bike……略してUBK。それは、世界最速の2輪ロードレース。死に至るかも知れない世界、それでも男達は最速に惚れ続ける。そんなUBKに125ccクラスにルーキーとして出場した、日本人ライダー新垣飛翔。まずは、GPの登竜門125ccクラスでチャンピオンを目指す！……という感じです。バイクの事やレースの事を知らなくても楽しく読んでもらえるよう努力中です。よろしくお願いします

## 第1話 開幕のUBK（前書き）

大好きなバイクについて書きました。  
どうぞ

## 第1話 開幕のUBK

UBK……それは、世界最速の2輪ロードレース……  
速くなければ意味が無い。速さ……それだけを競うスポーツだ……  
そんなUBKの最強王者新垣飛翔……

……に、なるべく今年125ccからルーキーとして出場するライダーだ。  
チームの名は、ローストチームというチームから出場する。  
はっきり言って、そんなにいいマシンではない。  
でも、でるからには勝つために、ひたすらマシンをはしらせる。

―開幕戦 カタールGP―

「ん〜いよいよ世界選手権開幕だな」

飛翔はピットのそとでのびていた。

「おい。セッティングできたぞ〜」

チームスタッフが声をかけた。

「あつ、ありがとうございます」

今は、フリープラクティスFR1が行われている。

「じゃあ、世界選手権1年目、がんばれよ」

「はいっ!」

こうして、飛翔は、バイクにまたがった。

ピットから出てから初めのラップをサイティングラップという。

飛翔は、サイティングラップをはしっていた。

その時……

ヴォオン！！

へアピンコーナーであっさりと飛翔を抜いた。

(何だ……あの速い奴……ゼッケンナンバー54番か……)

その時知った。世界には自分より速い奴はいっぱいいる……

でも、初めて乗るマシンを懸命にはしらせた。

そしてFP1を終えた。

「飛翔、結果は9位だ。このマシンでしかもルーキーでこの順位は立派だ」

「ありがとうございます。あっ、そっいや、ゼッケン54番って誰ですか？」

「ん？ 54番は、アルベルト・バスタージだな……こいつは2位タイムだ」

(2位！？ って事は、あれより速い奴がいるって事か……)

世界には速い奴がいっぱいいる事を知った飛翔。

次回はFP2に挑む！

**第1話 開幕のUBK（後書き）**

よろしくお願いします。

## 第2話 バンクハースパー（前書き）

グダグダの上に分かりにくいかもしれません。

P ' S ' ,

後のほうになってくるとしっかり説明を入れてやっています。  
こちらでは直す時間がないので……申し訳ありません。

## 第2話 バンクハースパー

F P 2も終えた開幕戦カタルGP。次は予選となる。

飛翔は、チームのメカニックと話していた。

「ん、どちらも平均的にいいタイムだ。このセッティングで予選はいこう!」

「はい!」

「マシンが良くない以上、一つでも前のグリッドがいい」

「そうですね」

そういった話をして、その日を終えた。

次の日、予選当日。

「じゃあ、がんばってこいよ!」

「はい!」

飛翔はマシンにまたがり、コースへとでた。

予選時間は、45分間。その間に走り、速いタイム順にグリッドが決まる。

ピットインは自由だ。

飛翔は一生懸命マシンを走らせた。

メカニックでは……

「いいタイムだな。練習走行のタイムもう超えてるぞ」

「でも、やはりストレートスピードに劣るな……」

「今飛翔は、6番手タイム。この辺りはめまぐるしく順位が入れ替わってるな……」

こうして、あっという間に予選は終了した。

「あの〜俺何番グリッドですか？」

「ああ、7番グリッドだ。ルーキーにしたら上出来だよ」

「……で、アルベルトはバスタージは？」

「バスタージは、2番グリッドだ。ポールポジションはグランツだな。」

「そういった会話をしていると、違うメカニックがこっちに来た。」

「しっかし、今年もバンククハースパーは凄えな……」

「バンククハースパー？」

「ここ5年間で、3人のチャンピオンを誕生させてるチームだ。今年は、グランツとバスタージだな」

「……………」

「まあ、明日は決勝だ。ゆっくり休めよ」

「そう言われ、飛翔は就寝した……」

第2話 バンクハースパー（後書き）

次は決勝！！

### 第3話 カタール決勝(前書き)

展開早いですが、ご了承ください。

### 第3話 カタール決勝

〈開幕戦カタールGP決勝当日〉

実況：寺野大治

解説：坂谷一樹

「さあ、いよいよ2011シーズンが幕を開けます！最初は125ccの決勝です。実況は私、寺野。そして、解説は坂谷一樹さんです。坂谷さんお願いします」

「お願いします」

「いよいよ開幕しました！ 2011シーズン決勝の様子です。

カタールロサイルサーキット……

「いいか、飛翔落ち着いてな」

「分かってるんですけど……緊張しちゃって……」

「ははは……ひとまずポイント獲得を目指せ」

「そうですね、頑張ります」

〈開幕戦カタールGP スタートイングリッド〉

1 ユルジュナー〓グランツ

2 アルベルト〓バスタージ

3 ミニツク〓ジョーズ

4 プロード〓デュラン

5 デナガス〓ワノマール

6 デクトール〓チエート

7 新垣飛翔

8 ジュゴズ〓ビスラーク

(以下略)

「さあ、実況の寺野に戻ります。レッドシグナル……ブラックアウト！」

決勝レースが幕を開けた。

ローストチームピットにて……

「よし！ 飛翔いいスタートだ！ 5番手につけている！」

「ポールショットは、バスタージか……」

「グランツが少し遅れたな…… 4番手……」

練習走行でも速かったバスタージがトップで第一コーナーを旋回していく。

それにジョーズ、チエート、グランツと続き、その後ろの5番手に飛翔はつけていた。

残り10周……

「トップ争いは、バスタージ、ジョーズ、グランツか……」

「やっぱ、いいマシンには勝てないな……」

「でも、飛翔はチエートとの争いで4位だ！」

「ペースはかなりいいぞ！ 予選タイムはもう超えてる」

「いや……しかしここでグランツ、ファステストか……」

ラストラップ……

「結局、グランツ独走だな……」

「飛翔も何とかチエートから逃げて、4位だろつな……」

実況：寺野

「今、グランツフィニーシューッ！ 2位にジョーズ、3位バスター  
ジとなりました。さて、日本人ライダー新垣は…… 4位フィニッ  
シュ！」

〜ピット〜

「すげーじゃねえーか飛翔！ デビューが4位だなんて！」

「ありがとうございます」

「きつとこれはいい経験になる……」

「次もがんばれよ」

「はい！」

「そうだ！ この後のGPクラス見ていけよ。刺激になるぜ、きつ  
と」

そう言われ、飛翔はGPクラスを見る。  
いい刺激となるだろうか？

第3話 カタール決勝（後書き）

次話もお願いします。

## 第4話 世界最速の男(前書き)

個人的に楽しかったです。  
どろぞろ

## 第4話 世界最速の男

「おっ、次GPクラスか」

noto2クラスの決勝も終わり、最高峰クラス、noto GPクラスが開幕されようとしていた。

「え〜っと……ポールポジションはグラティビッチか〜、速そうな名前だな〜」

そして、GPクラスも開幕を迎える……

シグナルが黒になり、ライダー達が一齐に飛び出していった。ポールポジションのグラティビッチが、一番で飛び出す。

そして、なんと一周目が終わった時点で1秒の差をつけた。

後ろにも、有力なライダーがたくさんいる。

それを、相手にもしない速さで走り抜けていく。

(なっ……何なんだこいつ……)

GPクラスは世界中から、より速く選りすぐりのライダーが集まったクラス。

そのライダー達を微動だにしない速さ。

「あ……あれが、世界最速のライダー……」

(戦ってみたい！ あの伝説のライダーと！)

そのままグラティビッチは独走優勝。

2位に、20秒の差をつけた。

こうして、開幕戦カタルGPは、幕を閉じた……

「マナージャー……」

「どっ……どうした飛翔!？」

「俺、グラティビッチと戦ってみた！」

「ははは、いい刺激になったみたいだな。でも、GPクラス行く前に、125、noto2で成績残さないとな」

「いや、残すんじゃないくて、チャンピオンになって行く！」

「いい意気込みだな。でも金銭的に、いいマシンは提供できない。それでもいいか？」

「もちろんだっ！」

「よしっ、じゃあ次戦のスペイン・ヘレスもがんばるか！」

「おうっ！」

GPクラスからいい刺激をもらった飛翔……

次戦は、表彰台を狙う！

第4話 世界最速の男（後書き）

次話もご一読ください。

第5話 第2戦 スペイン・ヘレス 開幕！（前書き）

くそ短くてすいません。  
お願いします。

## 第5話 第2戦 スペイン・ヘレス 開幕！

「第2戦スペインGP ヘレスサーキット」

「ローストチームピット内……」

「うっし！今から予選だ。気合入れていこー！」

「おー！」

第2戦は、情熱の国スペイン・ヘレスサーキットでの開催。

2010年は、ワールドカップと並ぶくらいの視聴率だったとか

……

今、最もモータースポーツが人気の国だ！

その上に、バスタージの地元でもある。

飛翔は、ピットから出て行き、走り出した。

路面には、<sup>かげろう</sup>陽炎が見えていた。

それ程、暑いのだ。

暑さに耐えながら、マシンを懸命に走らせた。

予選の結果は……

飛翔は、9番手だった。

地元のバスタージは、3番手、グランツが、1番手だった。

「うん！ いいぞ飛翔！ 決勝もこの調子でな」

「はいっ！」

いよいよ、第2戦開幕！

しかし、レース後には前代未聞の悲劇が……！？

第5話 第2戦 スペイン・ヘレス 開幕！（後書き）

次話もいっちょお願いします。

## 第6話 解雇!?

### 第2戦スペインGP決勝

9番グリッドで飛翔は、メカニックと話していた。

「いいか、飛翔。ひとまず、いいスタートをきれるようがんばれ」

「はい」

「ここはストレートがそれほど長くない。勝機はあるからな!」

「がんばります!」

そう言って、飛翔はウォームアップラップに突入した。

各ライダーがグリッドについた。

レッドシグナルから真つ黒のブラックアウト!

ライダー達は一斉にスタートをきった。

「うわっ! バスタージすげえロケットスタートだ!」

「おい! 飛翔は?」

飛翔はまだグリッドから動いていない。

「マシントラブルか!?!」

すぐさまピットへ入れさせた。

なんと、一周もせずに飛翔の2戦は終わった。

結局、バスタージがそのまま独走優勝を果たした。

---

次の日、飛翔に電話がきた。

「もしもし……あつ、メカニックの方じゃないですか」

「飛翔君、申し訳ないが……君は解雇だ……」  
「はっ!?!」

突然言い渡された、解雇……

理由は一体……!?!?

第6話 解雇！？（後書き）

短くてすみませんorz

## 第7話 見えた光（前書き）

解雇後の飛翔だったり、来季だったりです。

## 第7話 見えた光

「なっ……何で解雇なんですか!？」

「……金銭問題だ」

「金銭問題……」

「グデューリという、ライダーがスポンサーを持って交渉してきたんだ」

「だからって、何で僕を解雇するんですか!？」

「……こういう下つ端のチームは、金のある奴が欲しいんだ」

その言葉を聞いたとき、一瞬時が止まった。

金が無いから……解雇された……

「そういう事だ、飛翔。悪いな」

こうして、新垣飛翔の2011年シーズンは、たった2戦で終わった。

7ヶ月後

飛翔は、家でテレビを見ていた。

番組は、UBK最終戦バレンシアグランプリだ。

125ccクラスは、結局グランツが、チャンピオンを獲った。

ローストチームのバイクは、グデューリのお金のお陰で、とてもいいバイクに仕上がっていた。

「もう最終戦か。早いな。時がたつのは」

今年は、飛翔にとって、最悪の年となった。

信じていた人たちに、裏切られたのだ。金を理由に……

「ははっ、バスタージ、ランク2位か……やっぱり速いんだな。あいっ」

カタールのテスト走行の時、抜かれた時に思ったんだ。飛翔は。

そして、あんな奴に勝ちたいって……思ったんだ……

「なのに……何で……俺はこんな所にいんだ……何であいつの所にいねえんだ……何で……サーキットにいねえんだ！」

自然と涙があふれ出た。

飛翔は、夜までずっと泣き続けた……

その頃、某チームでは

「んじゃあ、来季、このチームはワノマールを起用するんですね。

キュレリーさん。……で、あと一人はどうします？主力は、バスタージ以外、全員Ultimate2に行っちゃいますし……」

「決まっているんだ、俺の中では」

「誰なんですか？」

「とても、強くて上手いライダーだ」

「そんな人もう他には……」

「いる！ 新垣飛翔というライダーが！」

「新垣！？ あいつを起用するんですか！？」

「ああ、そうだ。ローストの、あのバイクであそこまで走れるんだ……あいつが欲しい」

「でも……ここチャンピオンチームですよ！？ 2戦しかGPに出していないライダーを起用するのはちよつと……」

「それでも、起用する。あいつが必要だ！」

「ちよつ……」

「よって、来季、ブルーレッド・アジヨ・モータースポーツでは、ワノマールと、新垣を起用する！」

見えた希望……飛翔、GP復帰なるか！？

第7話 見えた光（後書き）

次話も頑張ります。

## 第8話 契約！ブルーレッド・アジヨ・モータースポーツ

（ブルーレッド・アジヨ・モータースポーツ ピット内）

「じゃあ、早速電話しましょうか。キュレリーさん」

「ああ、そうだな」

キュレリーは受話器をとり、飛翔の番号に連絡する。ローストチムから聞いた甲斐があったとキュレリーは電話をかける前に話していた。

「…………留守だ」

「うっそ〜ん！」

しかし飛翔は電話に出なかった。

その頃、飛翔はそこら辺を散歩していた。

世間は（UBKの）もう、ストーブリークの時期だった。

ストーブリークというのは、来季に向けて発進していく準備の期間の様なものだ。

「はあ…………」

飛翔は、大きなため息をついた。

「あれ？ 飛翔君じゃん！」

向こうから、一人の女性がやって来た。

「どうしたの？ こんな朝早くに…………」

「おお、氷上か。ちよつとな…………」

飛翔は、氷上に好意を抱いていた。

幼馴染で、いつでも相談にのってくれる、優しい人なのだ。

「…………最終戦見て、何か思ったの？」

いきなりの凶星だ。

「思ったな。サーキットでバイクを走らせたいって…………」

「じゃあさ！ スポンサー連れてけば？」

「そんな簡単にできないよ……日本では、モータースポーツがあまり浸透していないから」

「そっか……どうにもできないの？」

「ああ、どうにも。どこかのチームからの契約を待つだけだ」

「じゃあね……約束して！」

「は？」

「もし、契約出来たら、日本GPで優勝して！」

「……分かった。約束する。絶対優勝するよ！」

「それでこそ飛翔君！！ 頑張つて！ じゃっ！」

「ありがとな、氷上」

飛翔は、気合を入れ直した。

「……キュレリーさん……どうですか？」

「……いない」

「もう、諦めませんか？ 向こうも、出る気がないんじゃない……」

キュレリーは、もう一度かけなおした。

「話聞いてますか！？」

「あつ、もしもし？ 新垣飛翔さんですか？」

「繋がったのかよ！」

「はい、新垣ですけど……どちら様ですか？」

「申し遅れたな。私は、ブルーレッド・アジヨ・モータースポーツのチームマネージャー、ピゴスト「キュレリー」だ」

いきなりタメ口になったキュレリーに飛翔はぎょつとした。

「ブルーレッド！？ 何で名門のチームが、僕に電話を？」

「来季の125ccクラスに私達のチームから君を起用したいんだ」

「僕を！？ ……何ですか？」

「カタルGPを見て思ったさ。ローストという、どこよりもストリートが劣るマシンで、あのコースで4位はすばらしい」

カタルのロサイルサーキットは、ストリートがとても長いコースだった。

「それに……」

「それに？」

「君は、あのレース、ファステストラップをたたき出したんだ」

「ファステスト!？」

「そう。グランツよりも、バスタージよりも、速いタイムだ」

「バスタージよりも……」

「本当に心の底から思ったのは、いいマシンに恵まれれば、すばらしいライダーになると。だから、来てほしい、我がチームに! すぐには言わん。電話番号教えるから、ゆっくり考えてくれ」

「はい……そうさせてもらいます」

飛翔は、電話を切った。

その夜、飛翔は考え込んでいた。行くか、行かないか。

サーキットに戻る。これは嬉しい。バスタージと再び戦える。

これも嬉しい。だが……

また、裏切られたらどうしよう……その不安でいっぱいだった。

飛翔は、携帯を開いた。

(氷上に電話してみるか……)

飛翔は、携帯の「氷上唯花<sup>ひかみゆいか</sup>」の所を押した。

「あ、飛翔君。どうかしたの？」

「さっきな、ブルーレッドっていうチームから電話きたんだ。チームに君がほしいって」

「やったじゃん! これでまたサーキットに戻るね!」

「まだOKしてないんだ」

「え? 何で?」

飛翔は、泣きながら答えた。

「怖いんだ。また……裏切られるんじゃないかって……」

「……………」

「氷上、俺どうしたらいいんだろう？ ……教えてくれよ」

「そんなの私が教えちゃ意味がない」

「え？」

「自分で答えを見つけなさい。そしたら、解答を教えてあげる」

「……………」

「ヒントあげるよ。飛翔君は、約束してくれた。以上！」

そう言っつて、電話が切れた。

飛翔は、考え直した。

つい、数時間前、約束したんだ。氷上と。

「もし、契約出来たら、日本GPで優勝して！」

これを実行しないと、裏切られた事が恐い自分が……

「裏切り者になる……」

飛翔は、決心した。氷上との約束を果たす為、そして、チームや自分の為、そして……

バスタージと戦う為に、契約をする！ という事を！

（翌朝）

「もしもし？ 飛翔君かい？」

「はい、新垣です。おはようございます、キュレリーさん」

「ああ、おはよう。早速だが、結果を聞こうかな」

「こんな僕で良かったら……お願いします！」

「そうか、ありがとう飛翔君！ こっちこそよろしくな！」  
「はい！」

こうして、飛翔は2012年シーズン、125ccクラスへの参戦が決まった。

そして、その後……

「答えでたの？ 飛翔君？」

「ああ、出たぞ。答えは、走る！ ただそれだけ！」

「理由も述べなさい！」

（先生かよ……）

「お前と約束したしな。日本で優勝するって。チーム行かなかったら、俺が裏切り者だ。その他にも、自分やチーム、バスタージ達ライダーと戦う為！」

「大正解！ 頑張つてね！ 飛翔君！」

「おう！」

飛翔は、氷上の事がますます好きになった。

勝とう。日本GPで！

こうして、来季のチームが決まった。

次は、バレンシアに行つて、キュレリーと対面！

第8話 契約！ブルーレッド・アジヨ・モータースポーツ（後書き）

契約です。

次話もよろしくです。

## 第9話 来国！ バレンシア（前書き）

テストが始まるので、土曜日くらいまで更新できません。  
ご了承ください。

## 第9話 来国！ バレンシア

契約後、飛翔は飛行機に乗り、バレンシアへ向かった。  
ついた空港で……

「あつ、来た来た。飛翔君！ こっちこっち！」  
読んだのはまぎれもないキュレリーだった。

「こんにちは」

「契約ありがとうね。じゃあ早速、リカルド・トルモに行こうか」  
「はい！」

二人は空港を出て、タクシーに乗り、バレンシアのリカルド・トルモサーキットへ向かった。

「バレンシア・リカルド・トルモサーキット」

「飛翔君、ようこそ！」

「ブルーレッド・アジヨ・モータースポーツへ！」

チーム全員が出迎えてくれた。

「まずは、自己紹介だな。私は、電話でも申したとおり、ピゴスト  
「キュレリーだ。このチームのチームマネージャー。よろしくな」

「僕は、キナフル「アゴスター。普通にメカニックだ。よろしく」

「俺は、コシン「ジュイラーズだ。よろしく」

「最後に、チームメイトになる、デナガス「ワノマールです。よろ

しく」

キュレリーが話し始める。

「じゃあ、今からテスト走行が始まる。ワノマールは、レースの準備。飛翔はこっちの部屋でミーティングだ」

「分かりました！」

全員一斉に動き出した。

ワノマールはマシンにまたがり、準備をし始めた。

そして、メカニックの二人もセッティングにとりかかる。

「飛翔！ こっちに来て！」

飛翔はキュレリーとミーティングをする。

↳隣部屋↳

キュレリーと飛翔が話していた。

「じゃあ早速だけど飛翔。ミーティングを始めるよ」

「はい」

「まず、この後テスト走行してもらうけど……」

「……………」

「あんまり速いタイムを狙わない事！」

「え！？ 何ですか？」

「君は確かにうまいんだ。優勝候補のバスタージに負けなくらい。ただ、彼に一つ劣るところがあるんだ」

「それって……」

キュレリーは、ビシッと指を指していった。

「経験の差だ！」

「経験か〜！」

それもそのはず、実際2戦しか走ってない。

その上、スペインは一周も出来ていない。  
という事で飛翔は、正確には1戦しか走っていない事になる。

「その差をつめる為にも、テスト走行はとても重要になってくる」  
「という事は、シーズンが始まるまでの2ヶ月は、バイクに慣れる  
と……」

「物分りがいいじゃないか。まさしくその通りだ」

そう言って、キュレリーは立ち上がった。

「よし！ 早速テスト走行行くか！」

「はい！」

そして、飛翔は約1ヶ月ぶりにバイクにまたがった。

**第9話 来国！ バレンシア（後書き）**

次話はテスト走行です。

第10話 39秒台の壁(前書き)

ふい〜……テスト終わった〜。

頑張りました。どうぞ〜

## 第10話 39秒台の壁

約11ヶ月ぶりにバイクにまたがった飛翔。

「よし！ 行って来い！」

「はい！」

飛翔が行こうとしたとき、メカニックのアゴスターがこっちに来た。

「おい…… キュレリーさん、飛翔くん」

「おいおい、今から行こうとしたのに、何だ？」

「ちよつと話が……」

「じゃあ、飛翔をコースに出してから聞く……」

「いや、飛翔君にも聞いてほしい話なんです」

「へ！？ 俺？」

スタートしようとしたが、アゴスターに連れられて、さっき、キュレリーと話したところに行った。

「で、何だ話は？」

「先ほどのバスタージの周回のラップですが…… 1分39秒台です」

「なっ…… それは本当か！？」

「はい……」

バレンシアのリカルド・トルモサーキットで、そのタイムは驚異的だった。

キュレリーが予想外だったように飛翔とアゴスターに向けて言った。

「まさか……バスタージがここまでテクニクを磨いていたとはな  
……」  
「本当ですね。去年はマシンに頼った走りでしたけど、今年は違う  
ようですね」

アゴスターも驚いた様子だった。

「全く……本当に計算外だ。……なあ飛翔」

「はい？」

「作戦変更だ。最初からとばして行け！」

「え？ マジですか？」

「ああ。速いタイムを出すと同時にマシンに慣れてくれ……」

「でも……」

「これができなきゃバスタージに勝てない！」

飛翔はその言葉にももちろん反応した。

ここでバスタージに勝てないのは悔しすぎる。

「分かりました。そういう事なら早速走ってきていいですか？」

「ああ、もちろんだ」

飛翔は部屋から出て、すぐさまマシンにまたがった。

「よし……行って来い」

「行ってきます」

飛翔は、コースへと出て行った。

サイティングラップも終え、本格的に走り出した。

（すごい……ストレートの速さが全然違う。これなら、勝てるかも  
！）

綺麗に第1コーナーを旋回していく。

「ん〜……バスタージには2秒も及ばずか」

キュレリーがラップタイムを見て、そんなことを言った。

「でも、綺麗なコーナリングですよ〜」

アゴスターは頑張つて褒めるところを探し、キュレリーに言った。

「おっ、帰ってきた！ タイムは……1分41秒か」

「バスタージは今、ピットで様子を見ていますね」

「このテストで、一気に注目を浴びれば、シーズンはおもしろくなるぞ〜」

飛翔は、その後も変わらずに走っていった。

2周目を終え、ピットからのサインを見る。

（41秒か。あと2秒も縮めなきゃいけないのか……まっ、集中してタイムを伸ばすのみ！）

「40秒台前半……」

再び帰ってきた飛翔のタイムをキュレリーが計った。すると、さつきよりも1秒半ほど速くなっていたのだ。

「えっ！？ マジですか!？」

「まさか、もうコースに慣れ始めているのか」

「この調子だったら、39秒台入ってきますよ!」

「現在も飛翔は2番手タイムだ。雑談してたせいで、この周がラストだ」

（前にいるのって……チエートか）

昨年のルーキーオブザイヤー受賞者、デクトール「チエート。

今年はそのバンクハーアスパーチームに移籍したのだ。

（てことは……凄くいいターゲットだ!）

「……いけるかもしれん」

「ここで前にチエートがいると、スリップが効きますもんね」  
「ラストの後半セクション、飛翔が特別速いんだ。あそこでグッと差を縮めて、最後のストレートで、一気にスリップでタイムを伸ばす！」

飛翔は第3セクションという得意なコーナーに差し掛かっていた。  
(よしっ！ 縮めた！ 最後は……ストレートだ！)

そして、チエートと飛翔はストレートに差し掛かった。

飛翔：(……………よしっ！ 来た！)

スリップストリームを使って飛翔が前に出た。

「は……入った……39秒台」

「すげー！」

「だが0.1秒、バスタージの方が速い」

「てことは……2位ですか……」

「そうだが……本当にチャンピオン取れるかもしれんな」

「お疲れ様です」

飛翔がピットに戻ってきた。

「で……何位でしたか？」

「2位だ。1位がバスタージ」

「は、負けたか……」

飛翔がその場であぐらと肩をおろす。

それを見たアゴスターがまた褒める。

「でも凄いよ！ 39秒台なんて！」

「ああ、実にすばらしい。はははっ、シーズンが楽しみだなこれは」  
キュレリーも飛翔を褒め称えた。

テスト走行最終結果

1.バスタージ

- 2 飛翔
- 3 チェート
- 4 クデューリ
- 5 ウノマール

(以下略)

くバンクハースパーチームピット内く

バスタージがラップタイムを見て、飛翔の事を気にしていた。

「2位……新垣飛翔か」

「まさか、後ろにぴったりつけられてたなんて……」  
チェートも参った、といった感じでそう言った。

「だがこのタイム、まぐれに思えない」  
バスタージはニツと笑った。

「今シーズン……楽しくなりそうだ」

準備は全員整った！

次話、波乱の開幕戦！

第10話 39秒台の壁（後書き）

次話、いよいよ（そんなに待っていない）開幕戦です！

飛翔、バスタージ、チエート、ワノマールなど  
たくさんのライバルと戦います！

第11話 開幕カタル！ライバルの思い（前書き）

久しぶりです。

どうぞ



だが今回、バンクハーアスパーが作戦に出た。

キュレリー：「おいおい・・・チェートがワノマールの真後ろじゃねえか・・・」

アゴスター：「というか、バスタージは飛翔の後ろです！！！」  
キュレリー：「これじゃあ、スリップ使われまくりだな・・・」

このロサイルサーキットは、ストレートが1kmを超えるコース。フィニッシュラインも奥の方にあり、スリップストリームを使って前に出れる確率が高いのだ。特に軽量級は、スリップを使われると、極端にスピードが落ちる。ということは、ラップタイムもそれなりに落ちるのだ。

その影響もあってか、なかなかマシンのストレートが伸びなかった  
飛翔。

逆にバンクハーアスパーの2人はとても伸びた。

予選中のピットの出入りは自由なので、後ろにつけられていると分かったら入ることも出来る。

飛翔：（バスタージとチェートが後ろに・・・これは一旦ピットに入った方がいいな。）

足でサインを出し、ピットに入っていった。

すると、バスタージとチェートも入ってきたのだ。

飛翔：「キュレリーさん。2人がつけてきます。」

キュレリー：「おそらく、今出ても2人はついてくるな。」

飛翔：「ちつくしよー！ー！！こんなレース楽しくねえ！！！何  
考えてんだあの2人！！！」

キュレリー：「おそろく、あの2人の意思じゃない。」

飛翔：「え！？」

キュレリー：「チームマネージャーの、『プラハ』マルチーニ  
の命令だ。」

飛翔：「命令か・・・2人もやりたくてやってるんじゃない  
んだな。」

キュレリー：「チエートはな。だがバスタージは違う。」

飛翔：「え？どういう事ですか？」

キュレリー：「あいつは、バイクレースを楽しんでいるか  
らだ。」

飛翔：「は！？」

## 第11話 開幕カタル！ライバルの思い（後書き）

お気づきかもしれませんが、この前から少し書き方を変えています。  
レース中など、表現しにくい部分は

〇〇：「

」

とあらわしています。

この方が分かりやすいと思ったので・・・

第12話 決勝日(前書き)

スタートだ〜。  
どうぞ

## 第12話 決勝日

飛翔：「バスタージがバイクレースを楽しんでない!？」

キュレリー：「ああ。あいつは、親が凄く有名なバイクレーサーだから親にいやいやさせられているといってもいいな。」

飛翔：「もしかして・・・ブライト!!バスタージのこと?」

キュレリー：「ああ、そうだ。伝説のライダーがよみがえったと言われている。まっ、そういうことだ。あと、お前はもう予選出なくていい。」

飛翔：「何故ですか?まだあと10分も・・・」

キュレリー：「今日の予選でずば抜けているのは、お前と、バスタージ、チエートだ。他のライダーが抜けそうにない。あいつらはこちがでなきゃ出てこない。そうすりゃ、もうこれ以上あっちもタイムは伸びん。」

飛翔：「なるほど・・・」

そのまま予選は終了した。

〈予選最終結果〉

- 1 . バスタージ
- 2 . チエート
- 3 . 飛翔
- 4 . ワノマール
- 5 . クデューリ

くバンクハーアスパークチームピット内く

マルティニーニ：「よしー！いい調子だ。」

バスタージ：「ありがとうございます。」

チエート：「……………」

マルティニーニ：「明日の決勝もこの作戦でいくぞ。」

バスタージ：「はい。」

チエート：「……………」

くブルーレッド・アジヨ・モータースポーツピット内く

キュレリー：「じゃあ、明日の決勝はこのままのセッティングでいく。」

飛翔&ワノマル：「はい！……！」

キュレリー：「それと、アスパークからのスリップは気をつける。特に飛翔はな。」

飛翔：「はい！」

キュレリー：「じゃあ、明日の決勝も頑張るぞ！……！」

その他4人：「……………」

く翌朝・決勝日く

実況：「さあ……いよいよ開幕です……！2012シーズンのnot

OGP!!はじめは新設された、noto3クラスからです!!!  
各ライダー、グリッドについています!!!」

キュレリー：「いいか？スリップに気をつける。それだけだ。」

飛翔：「はい。」

キュレリー：「よし!!あとはウォームアップラップを待つだけだ。」

実況：「さあ、各ライダーウォームアップに出て行きました。解説の坂谷さん。このコースはどういったコースなんでしょう?」

解説：「なんとといっても、イタリアのムジエロに次ぐストレートじゃないですかね。フィニッシュラインが奥の方にあるため、最後のスリップで逆転も考えられます。」

実況：「ということとは、最後まで分からないと。」

解説：「そういうことですね。毎年鏝迫り合いが激しいですからね。」

実況：「さあ、各ライダーグリッドに着きました。では、参りましょー!!!」

実況：「2012notoGP、開幕戦カタルGP、noto3クラスの決勝・・・」

「スター——ト——」

## 第12話 決勝日（後書き）

あくまで、予定ですが・・・

- 1 . カタール
- 2 . スペイン
- 3 . 日本
- 4 . ポルトガル
- 5 . フランス
- 6 . カタールニア（スペイン）
- 7 . オランダ
- 8 . イギリス
- 9 . イタリア
- 10 . ドイツ
- 11 . アメリカ
- 12 . チェコ
- 13 . インディアナポリス（アメリカ）
- 14 . サンマリノ（イタリア）
- 15 . アラゴン（スペイン）
- 16 . オーストラリア
- 17 . マレーシア
- 18 . バレンシア（スペイン）

でやっついていきます。

あくまで、予定です。

### 第13話 激突、最後のスリップ

波乱の開幕戦がいよいよスタートした。

実況：「さあ、まずスタートですが・・・バスタージとチエートがいいスタート！！新垣は3番手ですね。グリッドどおりに第1コーナー、曲がっていききました！！！」

キュレリー：「よし、作戦通りだ。」

アゴスター：「何がですか？」

キュレリー：「飛翔との作戦会議で、1周目から最後のストレートまで、ずっと2人の後ろにつけるように行っておいた。」

アゴスター：「最後のストレート狙いですね・・・」

実況：「さあ第1コーナーバスタージがポールショット。新垣は・・・  
・変わらず3番手です。」

飛翔：（よし・・・作戦通り・・・）

1周目からバスタージとチエートがすさまじいバトルをくりひろげる。

それを飛翔はずっと伺っていた。

そういつたレースが10周くらいまで続いた。

飛翔：（おかしい・・・アスパーに動きがなさすぎる・・・）  
トップ集団は、バスタージ、チエート、飛翔の3人。

そこから少し遅れて、ワノマールがついてきている。

アゴスター：「キュレリーさん。飛翔いい感じですね。」

キュレリー：「それより、アスパーの動きがおとなしすぎる。」

アゴスター：「そう言われてみればそうですね・・・」

キュレリー：「何かあるかもしれん・・・ピットサインで飛翔に伝える。」

アゴスター：「了解です。」

アゴスターはバスタージとチエートの番号をはめ、よく観察するよう伝えた。

実況：「さあ！レースもいよいよ大詰め！！しかし、全く動きがありませんね。」

解説：「そうですね。特にチエートなんかもつと動いてましたけどね。去年は。」

チエート：（バスタージ・・・お前は本当にこれが楽しいのか？こんなレースが・・・こんな作戦・・・俺はもう・・・我慢できない！！！！！！）

実況：「あーっ！と！！！！ついにチエートがトップに躍り出ました！！！！」

バスタージ：（っ！！こいつ！！）

飛翔：（チエートが動いた！？）

チエート：（・・・）

実況：「そのまま3台はラストラップ！！！！！！」

キュレリー：「ここで重要になってくる最後のカーブ。しっかり立

ち上げる!!!!」

アゴスター：「がんばれ・・・飛翔君!!!!」

最終ラップの最後のカーブまで何も変動なく走り続ける。  
そして最後のカーブ。

飛翔：（よゝし・・・あとはこのコーナリングを・・・あれ？）

飛翔の隣にはバスタージがいた。

しかし、チエートは前にいた。

最終コーナーに入っていた順は、チエート 飛翔 バスタージの  
順番。

キュレリー：「なんてこった・・・バスタージのやつ、早くにスピ  
ードを緩めやがった!!!」

アゴスター：「これで、バスタージに勝つ確率が・・・」

キュレリー：「だが・・・チエート!せめてチエートだけでも抜く  
んだ!!!」

最後のストレート・・・

後ろにいる飛翔とバスタージがスリップにつく。

実況：「さあ~~~~!!!!テールトゥノーズ!!!!バスタージが前に出  
た!!!!」

2台分のスリップを使ったバスタージが前に出た。

飛翔もチエートを抜き去った。

実況：「優勝はバスタージ!!!!2位に新垣、3位にチエートが入  
りました!!!!」

**第13話 激突、最後のスリッパ（後書き）**

遅くなってすいませんでした。

3連休中に1回は更新したいです。

## 第14話 チェートのお願い

2012年のno to 3クラスのカタールGPはバスタージの優勝で幕を閉じた。

そのチームバンクハースパーチームのピット内・・・

マルティニ：「おめでとう、バスタージ。いい走りだった。」

バスタージ：「ありがとうございます。」

マルティニ：「それと・・・チェート。何故俺の命令を無視した？」

チェート：「それは・・・。」

マルティニ：「はっきり言え。何故だ？」

チェート：「あ・・・あんなレース・・・楽しくなかったからです・・・。」

マルティニ：「あきれたな。いいか？レースの世界は勝ちやあいんだ。分かったら俺の命令をおとなく聞け。」

チェート：「・・・いやです。」

マルティニ：「何だと？」

チェート：「これから俺は自分の、デクトールIIチェートのレースをします。」

マルティニ：「ふんっ。好きにするがいい。だが、従っておいた方が勝てる。それは忘れるな。」

チェート：「分かりました。」

バスタージ：「・・・。」

マルティニ：「それじゃあ、早くパルクフェルメに行け。」

（パルクフェルメ）

キユレリー：「お疲れ、飛翔。最後の事は気にするな。」

飛翔：「はい……」

チエート：「……新垣。」

飛翔：「ん……チエート……」

チエート：「予選ではあんなレースをしてすまなかった。これから  
は正々堂々と俺は戦う。」

飛翔：「そうか……」

チエート：「この事をワノマールにも伝えておいてくれ。それと・  
・俺ではバスタージには勝てない。だから……お願いだ。バスター  
ジに勝って、目を覚まさせてやってくれ……」

飛翔：「……ああ……まかせとけ……」

チエート：「ありがとう……じゃあな……」

そういつてチエートは表彰台につながる階段を上っていった。

〈表彰台〉

飛翔は初めて表彰台に上った。

だが、一番高いところじゃない。

3位のチエートがトロフィをもらった。

チエートはトロフィにキスをして、トロフィを挙げる。

2位の飛翔がトロフィをもらう。

同様にキスをして、挙げた。

優勝したバスタージもキスをしてトロフィを挙げる。

そして、ロサイルサーキットにスペイン国歌が響き渡った。

バスタージを祝福しているように聴こえた。

だが、開幕のあとの希望を期待しているようにも聴こえた……

〈ブルーレッド・アジヨ・モータースポーツ〉

飛翔：「よ……し……!!次はスペイン……!!勝つぞ……!!……!!



第14話 チェートのお願い（後書き）

次話、スペインへ!!!

第15話 本来の走り（前書き）

遅れてすみませんでした。

## 第15話 本来の走り

（スペイン・ヘレスサーキット）

灼熱の太陽がキラキラと輝いていた。

陽炎も見えている。

第2戦の舞台は、スペイン・ヘレスサーキット。

情熱の国で行われるレースは、10万人を超える人が見に来る。

ワールドカップに並ぶ視聴率の中、レースが繰り広げられる。

バスタージの地元で、去年はグランツの優勝だったが、今年はとも期待されている。

今から予選が始まる……

キュレリー：「よし2人とも！フロントロウに並べるよう頑張れ！

！」

飛&ワ：「はい！！！！！」

ブルーレッド・アジヨ・モータースポーツは予選に取り掛かろうと  
していた。

飛翔とワノマールがピットからコースへ飛び出していく。

サイティングラップを終え、いよいよ本格的に走り出す。

バスタージとチエートもピットから出てきた。

2人ともぐんぐんとマシンが伸びている。

キュレリー：「……意外だな……」

アゴスター：「何がですか？」

キュレリー：「バスタージよりも……チエートの方が速い。」

ここで調子を上げたのはデクトール「チエートだった。命令に従わなくなると、自分の走りが出て、気持ちいいようだ。

キュレリー：「チエートは・・・放たれたんだろうな。マルティエ二の呪縛に。」

アゴスター：「呪縛？何のことですか？」

キュレリー：「いや・・・何でもない。」

キュレリーの様子はおかしかった。

まるで何かを隠しているかの様に・・・

そのまま予選は終了した。

#### 最終予選結果

- 1．チエート
- 2．バスタージ
- 3．ワノマール
- 4．飛翔
- 5．クデューリ

「ブルーレッド・アジヨ・モータースポーツ」

キュレリー：「本当に予想外だ。チエートがここまで調子をあげてくるとは・・・」

キュレリーは頭を抱えながら言った。

飛翔：「おそらく、自分の走りをしてるんでしょうね。」

チエートはマルティエ二の指示は聞かなくなった。なので、本来の走りが出てくるのだろう。

ワノマール：「じゃあ、決勝はチエートさんマークですね！！！」

キュレリー：「そうでもない・・・」

ワノマール：「何ですか？」

アゴスター：「僕もそうでもないと思う。バスタージがそのまま黙っててる訳がない。」

キュレリー：「なんだって地元だ。このまま負けるわけないだろう。」

ワノマール：「・・・です・・・よね・・・」

2 戦も波乱の決勝となりそうだ。

本来の走りを取り戻したチエート。

地元でこのまま引き下がるわけのないバスタージ。

そして、ついに決勝が幕を開ける・・・

**第15話 本来の走り（後書き）**

次話は決勝です。

## 第16話 スペインGP決勝

「スペインGP・決勝日」

実況：「灼熱の太陽が降り注ぐ中、スペインGPが開幕しました！  
！」

解説：「温暖化の影響もあつてか、本当に今回は暑いですね」

実況：「さあまずは、notokクラスの決勝からです」

飛翔：「暑い・・・」

ワノマル：「全くだね・・・暑すぎるよ・・・」

キュレリー：「ほら、さつさとグリッドに行つて来い」

飛&ワ：「え〜・・・」

キュレリー：「頑張つたらアイスおごつてやる」

飛&ワ：「いつてきます!!」「」

飛翔とワノマルはすぐにマシンにまたがり、グリッドに向かつていった。

飛翔は4番グリッド、ワノマルは3番グリッドの位置についた。

飛翔：「キュレリーさん！俺、バナラがいい!!」「」

ワノマル：「僕はチョコで!!」「」

キュレリー：「いつとくが、頑張らなかつたらおごらないからな」

アゴスター：「僕、ミックスで!!」「」

ジュイラーズ：「俺はイチゴ」

キュレリー：「お前らな・・・今はレースに集中しろ!」

珍しくキュレリーが怒った。

飛翔：「分かりました。頑張つてきます」

ワノマル：「そうだね。勝たなきゃ」

2人は気を引き締めた。  
そして、ウォームアップラップにでる。

実況：「では、坂谷さん。このコースの特徴はどうでしょう？」

解説：「そうですね。非常にコーナリングがきついイメージはありますね。ストレートも長くはありません」

実況：「なるほど・・・カタルのような混戦は・・・」

解説：「見にくいですね。昨年もバスタージの独走優勝でしたから」

実況：「そのバスタージが、ポイントリーダーとして、地元にやってきました。2番グリッド」

実況：「さあ、各ライダー準備が整いました。では参りましょう！」

実況：「2012のスペインヘレスサーキットでのnote03クラスの決勝・・・スタートです!!!!」

実況：「さあ、まずいいスタートは・・・バスタージです！2番グリッドのバスタージが好スタート！」

解説：「新垣が2番手まであがってますね。いいスタートです」

実況：「ワノマルが3番手。チエートがスタートに失敗しましたね。クデューリの後ろ5番手」

キュレリー：「よし！いいぞ2人とも!!」

アゴスター：「このままついていけ!!」

ジュイラーズ：「ついていくより、どんだん前に出た方がいい」

アゴスター：「何ですか？」

ジュイラーズ：「2人に比べて、悔しいがバスタージの方が圧倒的に速い。前に出るときゃあ、逃げられる心配はないからな」

アゴスター：「なるほど・・・」

キュレリー：「ジュイラーズ！2人にその指示を頼む」

ジュイラーズ：「了解」

飛&ワ：（とにかく前に出る・・・）

1周目を終えた2人はピットからのサインを確認した。

言われた通りに飛翔が、第1コーナーでトップに躍り出た。

このまま終わればいいと思っていたが、後ろからすさまじい追い上げを見せていたライダーが3番手に来た。

デクトールチエートだ。

チエートはあっという間にバスタージを抜き去り、飛翔に襲い掛かった。

大波乱のレースはまだまだ続く・・・

## 第16話 スペインGP決勝（後書き）

言い忘れてましたので、ここでお伝えします。  
ポイントランキングを書いておきます。

1	バスタージ	25
2	飛翔	20
3	チエート	16
4	ワノマール	13
5	クデューリ	11
・		
・		
・		

です。

もっと詳しく聞きたければ感想にお願いします。

第17話 チェートにハプニング(前書き)

17話です。

## 第17話 チェートにハプニング

飛翔：（チェート・・・何だ！？その速さは・・・）

チェート：（すまん飛翔。このレースは負けられない）

第9コーナーで、チェートは飛翔を抜き去った。

と、その時！！！！

チェート：（うっ！！）

飛翔：（嘘だろ！！）

実況：「あーっつと！！チェート転倒！！スリップダウンしてしまいました。んゝ坂谷さんどうだったでしょう」

解説：「チェートはペースを上げていたところでしたからね・・・もったいないですね」

チェート：（ちくしょー・・・エンジンがかからない！！）

マルティニー：「だからいさぎよく私の言う事を聞いてれば良かったのに」

チェート：「ちくしょう・・・」

レースは、チェートが離脱したため、飛翔がトップにいた。

続いてバスタージ。ワノマールと続いていた。

キュレリー：「はあ・・・ここでバスタージファステストか・・・」

アゴスター：「このままじゃ引き離されます！！」

ジュイラーズ：「あせるなアゴスター。ピットサインで常にバスタージの前にいるようにしとけ！！」

アゴスター：「了解です！」

飛翔は、第5コーナーでバスタージに抜かれた。  
そこからバスタージは、引き離しにかかった。

ジュイラーズ：「やばい！このままじゃ逃げられる！！」

キュレリー：「不可能かもしれないな・・・優勝が」

アゴスター：「そんな・・・」

バスタージはその後もどんとペースを上げ、飛翔とワノマールを引き離していった。

次第に飛翔のペースが落ち始め、飛翔は3位を単独走行となった。

そのままレースは終了していく・・・

実況：「さあ！優勝はバスタージ！2連勝です！！2位にワノマール。3位に新垣飛翔となりました」

「パルクフェルメ」

飛&ワ「は〜〜・・・」

アゴスター：「そうしょげるなって！！」

ジュイラーズ：「そうそう。いい走りだった」

キュレリー：「次で勝てばいい。バスタージには」

飛&ワ「はい・・・」

表彰台では、結局今回も金色のトロフィーを持っていたのは、バスタージだった。

そして飛翔は、次戦の日本で、金色のトロフィーをとることを誓った・・・

第17話 チェートにハプニング(後書き)

次話は、地元日本へ!!!

第18話 帰国日本！（前書き）

遅れてすみませんでした。

18話です。

## 第18話 帰国日本！

〈日本！・・・への出発前〉

キュレリー：「そっぴや飛翔。パドックガールはどうする？」

飛翔：「パドックガール？」

キュレリー：「そっぴだ。地元だから、自由に選べたりするぞ」

パドックガールというのは、グリッドの横でパラソルを持っている女の人のことだ。ちよつとセクシーな服を着ている。

飛翔：「そんなの興味ないですよ。レースで勝たなきゃ！」

キュレリー：「そっぴか……」

そっぴして、ライダーたちは飛行機に乗り日本へ！！

〈日本・栃木ツインリンクもてぎ〉

飛翔たちは、日本GP決勝の舞台、ツインリンクもてぎサーキットにやっぴてきていた。

ここの名物は、ダウンヒルストレートからの90度コーナー。一気にスピードが出たあとからの、凄まじいブレーキングでのカーブはとてもしつゝい。そっぴしてこゝは、飛翔の地元である。

キュレリー：「まゝ、開幕まではまだあるし……日本の街をぶらぶらしたいな」

ワノマール：「僕もです！」

アゴスター：「楽しそっぴですもんね。日本」

ジユイラーズ：「僕も見てみたい」

皆日本に興味津々だった。

飛翔：「じゃあさ、東京に行こう。開幕まで2週間もあるんだし、宿泊は僕の家ですればいいし」

キュレリー：「悪いな」

飛翔：「いえいえ。じゃあ、宇都宮駅行きましょう！」

皆：「おー！ー！！！」

（東京）

飛翔たちは東京に着いた。久しぶりの東京に、飛翔も何だかどきどきしていた。

飛翔：「ひとまず、僕の家荷物置いてきましようか」

キュレリー：「ああ、そうだな。お願いする」

またまた、バスに乗って飛翔の家へ……

飛翔：「ここが僕の家です」

ワノマル：「立派なところに住んでますね」

飛翔の家はどこにもある、普通の1件屋だ。

ジユイラーズ：「というか、もう夜だな……」

キュレリー：「今日は休ませてもらっていいか？」

飛翔：「ええ、どうぞ」

アゴスター：「おじゃまします」

皆は飛翔の家が上がっていった。すると……

????：「……飛翔君？」

飛翔：「この声……」

????：「やつぱり飛翔君だ！帰ってたんだ」

飛翔：「氷上！」

氷上：「久しぶり」

フルネームは氷上唯花<sup>ひかみゆいか</sup>。飛翔の隣に住む人だ。飛翔がブルーレッドに入るときに相談にのってくれたり、その他も、様々な部分で優しい女性だ。茶色の長い髪の毛。綺麗な青色の瞳。何も変わっていないかった。

キュレリー：「飛翔。お客さんか？」

飛翔：「ええ、まあ……ちよつと……」

氷上：「レース見てたよ！やっぱり飛翔君速いよね！」

飛翔：「ありがとう……でも……」

氷上：「バスタージさんの事？」

またもやの凶星だ。

氷上：「彼、本当に速いよね。でもさ……何だか好きになれない走りだね」

それはおそらく、バスタージが命令で走っているからだろう。自身自身の走りをしていないからだ。

飛翔：「ああ、あいつはとっても速いさ。でも俺もあいつの走りは好きになれない。何故かは、あいつ自身がレースを楽しんでないからな」

氷上：「えっ……」

飛翔：「でも、絶対日本は勝つ。氷上との約束を守るためにも」

氷上：「うん！頑張つて！絶対見に行く！」

またもや氷上から元気をもらった。

ワノマル：「ふふふふ……飛翔君つたら……顔真っ赤ですね……」

ジュイライズ：「いい青春を送つてやがる」

アゴスター：「あの女の子も顔赤いですよ」

キュレリー：「なんておもしろい展開なんだ」

飛翔の家の窓から、4人は覗いていた。

キュレリー：「……良いこと考えた！」

ワ&ジユ&ア：「なにになに？」

嬉しそうに3人がよってくる。

キュレリー：「ごによごによ……」

ワノマール：「それいいですね！」

ジュイラーズ：「これでもあんな事言えるかな!？」

アゴスター：「ドツキリですね!!」

キュレリー：「日本GPが楽しみだぜ!!」

こうして、普通に2週間を過ごした。

そして、飛翔たちはツインリンクもてぎへ!!

## 第18話 帰国日本！（後書き）

次話、レース開幕です。

……の前に、久しぶりのFPからやります。

第19話 FPの悲劇(前書き)

遅れてすみません。

## 第19話 F Pの悲劇

「ツインリンクもてぎ」

舞台は日本の栃木にある、ツインリンクもてぎ。名物ダウンヒルストレートからの90度コーナー。ここで、すばらしいバトルが毎年繰り広げられる。

そんな日本GPのFP……

キュレリー：「よし！2人とも行って来い！」

飛&ワ「はい！」

飛翔とワノマールは気合をいれて、コースへと飛び出していった。そして、何回かラップを重ねる。

キュレリー：「やっぱ、飛翔速いな。ぶっちぎりのトップだ」

ジュイラーズ：「バスタージを0.5秒もつき離してる」

地元のライダーはやはり、走りなれたコースで速さを見せるのだ。しかし、悲劇はとつぜん起こる。

飛翔はダウンヒルストレートに差し掛かっていた。

そこからの90度コーナー！……その時！！

飛翔がハイサイドを起こし、大きく転倒してしまった。かなりの激しい転倒だった。

キュレリー：「飛翔！」

ジュイラーズ：「凄い大クラッシュだな……怪我がなければいいんだが……」

飛翔が痛そうにピットに戻ってきた。

飛翔：「いてててて……」

キュレリー：「すぐにメディカルセンターに行って診察を受けて来い。そして、FPはもう走るな」

飛翔：「はい……」

飛翔は診察を受けた。

結果は軽い打撲だった。

ジュイラーズ：「はあ。その程度で済んで良かったよ」

キュレリー：「本当だな。予選まではもう走らずにゆっくりしろ。

それが1番だ」

飛翔：「はい……」

せつかくの地元で怪我をしてしまった飛翔。

完治しないまま、予選に挑む……

## 第19話 FPの悲劇（後書き）

報告があります。

活動報告でも書かせてもらったんですが、この小説は、本当に書くのに時間がかかるので、毎週金曜日の更新にしました。

大抵は、18:00くらいだと思うので、よろしくお願いします。

第20話 日本GPI予選(前書き)

20話達成だー！

## 第20話 日本GP予選

日本GP予選日。

練習走行（FP）で軽い打撲をした飛翔。完治しないままの予選となった。

キュレリー：「これだけは言っとくが、無理は絶対にするな」

飛翔：「はい……」

氷上と約束した日本GPの優勝も遠ざかってしまったかもしれない。ただでさえ最速のライダーのバスタージを、打撲状態で勝たなきゃいけないのだ。

その他にもチエートやワノマールといった速いライダーはたくさんいる。

飛翔は痛みを耐えながらコースへと出て行った……

だが、その痛みがあるとは思えない走りを飛翔は演じた。バスタージとほぼ互角のタイム。1位と2位の間をさまよっている。

アゴスター：「この調子だったら勝てるかもしれないね！」

ジュイラーズ：「おそらく無理だ」

ベテランのメカニックジュイラーズは不可能だと考えた。

ジュイラーズ：「確かにいいタイムは出してる。でも、20何周を走り続けるのは絶対にきつい」

ジュイラーズがそう言った途端に、飛翔がピットに入ってきた。

キュレリー：「おつかれ」

飛翔：「どうも……」

飛翔はわずか3周をしただけでピットに入ってきた。

相当の痛みを感じるのだろう。

そのまま飛翔は休み続けたが、あまりグリッドは変わらなかった。

〈予選最終結果〉

- 1 バスタージ
- 2 飛翔
- 3 ワノマール
- 4 チェート
- 5 クラツニー

その後飛翔はすぐリハビリを開始した。

まだまだ最速のバスタージ。

打撲を負った飛翔。

チームメイトが地元ワノマール。

一気に調子を取り戻したいチェート。

数々のライダーによって、日本GP決勝へ！

第20話 日本GP予選（後書き）

次話は決勝です！

## 第21話 まさかのドッキリ

〈決勝日〉

実況：「さあ！迎えました第3戦日本GP！！まずはnoto3クルアの決勝です」

ついに迎えた決勝日。快晴のもてぎでレースが繰り広げられる。各ライダーはグリッドについていた。

そこで、お忘れかもしれないが、ドッキリが決行される。

キュレリー：「おゝい。飛翔。顔が真っ赤だぞ」

飛翔：「……」

飛翔へのドッキリとは……

氷上：「あの……頑張ってるね。飛翔君」

氷上のパドックガールだ。

あのときに、お互いが両思いなのを感じたキュレリーたちは、氷上にパドックガールをお願いして飛翔の赤面を見ようとしたのだ。

ついでに氷上も赤面。

2番グリッドでそういつたことが起きてると、3番グリッドのワノマルは笑いを頑張ってるからいた。

チエート：「……何やってるんだ。ブルーレッドは……」

4番グリッドのチエートはそう思っていた。

バスタージ：「ばかばかしい……」

バスタージもあきれている。

そして、ウォームアップラップを終え、レースが開幕しようとしていた。

実況：「では参りましょう！」

実況：「2012年シーズン第3戦日本GP No.3クラスの決勝……スタートです！」

シグナルが真つ黒になり、一斉にスタートをしていった。ポールショットはバスタージだったが、ぴったりと後ろに飛翔がつけた。

キュレリー：「よし！いいぞ！」

ジュイラーズ：「最終ラップまで無理をせず……最終ラップに勝負に出る！」

アゴスター：「それまでついていってくれよ……飛翔」

1周目を終えたが、もうすでに2位の飛翔と3位のワノマールの差が出始めた。

それ程に、前2台が速いということなのだろう。

そしてレースは中盤へ……

第21話 まさかのドッキリ(後書き)

次話も金曜日に更新するよう頑張ります。

## 第22話 5 Lap to go!

バスタージと飛翔との差は次第に広がり、バスタージは1位を単独走行。飛翔は2位を単独走行となっていた。その差は2秒程度。

実況：「解説の坂谷さん。新垣はやはり苦しんでますか？苦しそうに見えますが……」

坂谷：「いや、そんなことはないですね。飛翔はこんなんで終わるライダーじゃないですよ」

実況：「自信满满々ですね……」

坂谷：「元チャンピオンから見てくださいよ」

坂谷さんの言うとおり、飛翔は苦しんでいなかった。むしろ作戦通りといったところだろう。

バスタージとの差は、残り5周で3秒差程度がいい。

キュレリー：「無理なく走れてるな」

アゴスター：「しかし……怪我をカバーする走り方で、よくチエートたちに追いつかれませんか」

ジュイラーズ：「それほどに飛翔は速いってことだ。万全だったら、バスタージは敵じゃなかっただろうな」

飛翔は、その後も2〜3秒差を保ち、走っていった。

そして残り5周……

キュレリー：「よし。やるぞ」

ア&ジュ：「了解！」

アゴスターはピットから飛翔に指示を出した。

その内容は、

『残り5周。追いつけ』

だった。

飛翔は無理をしていない分、タイヤの状態が非常によかった。バスタージのように、本気で走っていると、タイヤが削れてきて安定感が保てないうえ、ペースも落ちてくる。バスタージとの差は3秒差。ということは、最終ラップぎりぎりです追いつけるくらいだ。

キュレリー：「さあ、始まるぞ……」

飛翔の快進撃が！

第22話 5 Lap to go! (後書き)

次話、快進撃開始!

第23話 飛翔のファステスト（前書き）

日本GPもクライマックスへ！  
どうぞ！

## 第23話 飛翔のファステスト

5周目から走り出せ……

それには、キュレリーが考えた素晴らしい作戦だ。

軽い打撲を負っている飛翔には、20何周というレースは苦しすぎる。

そこで、残り5周から、本気で走り追いつく。

そして優勝。

アゴスター：「でも、バスタージはポールポジションですよ!? 追いつけるわけが……」

ジュイラーズ：「追いつけるな」

アゴスター：「何でそう言いきれるんですか!?!」

ジュイラーズ：「だって、あいつ3周しか予選走ってないんだぜ?」

アゴスター：「……そうか!」

ジュイラーズ：「つまり、もっと走りこんでたら、もっと速かったって事だろ?」

そして、その周を飛翔は終え、次のラップへと進む。

キュレリー：「ファステストだ!」

アゴスター：「すげー……」

飛翔のタイムは、0.5秒もバスタージより速かった。ミスなくいけば、次には3秒差が2秒差になっている。

ジュイラーズ：「それに、もっとタイムをあげれる。最終ラップギリギリで追いつけるな」

その周もファステスト走行。今度は、0.6秒も速かった。

実況：「新垣凄いですね……ねえ、坂谷さん」

坂谷（解説）：「そうですね。まあ、この作戦……キュレリーらし

いすね」

その周はファステスト更新とはならなかったが、0・6秒速いタイムだ。

これでタイム差は1・3秒。次の周には、スリップストリームが効く距離まで近づく。

マルティニ：「何だと!? 新垣がここまで……」

バンクハーアスパーチームもパニック状態だ。

ここからの追い上げ、そして、怪我人にバスタージが負けるかもしれない状況なのだから。

この周は、0・6秒縮めた。これで0・7秒差。そしてこれが最終ラップ。

コーナーごとに差を詰めていく。

この周は、各部分でファステストをたたき出した。<sup>セクター</sup>

そして、バスタージに完全に追いついた。

アゴスター：「やった! 追いついた!」

キュレリー：「でも、場所が場所だな」

実況：「ついに新垣飛翔追いついた!」

坂谷：「何の偶然か、凄いとこで追いつきましたね」

飛翔がバスタージに追いついた場所は………

『ダウンヒルストレート』

## 第23話 飛翔のファステスト（後書き）

次話、日本GPに終止符が打たれる！

……映画の宣伝みたいwwww

第24話 Last of Downhill straight (前書き)

日本GPフィニッシュ！

結末は……

24話でござー！

## 第24話 Last of Downhill straight

ダウンヒルストレートでバスタージに追いついた飛翔。  
そこは、自分を打撲にしまった恐怖のコーナー。

アゴスター：「でも、ここで抜く必要はないんじゃない……」

キュレリー：「ここが最後の大きな勝負どころだ」

ジュイラーズ：「そこから、抜けることは不可能じゃないが、これ以上打撲を刺激するのはまずい」

ピットは、ここで抜くのが一番いいと判断した。

あとは、飛翔次第だ。

飛翔はダウンヒルストレートで、思い返した。

自分がチームに恵まれなくて悩んでいたとき、ずっと相談にのってくれた氷上との約束。

『日本GPで勝って！』

氷上に勝利を捧げたい。

そんな俺を、お前が必要と言ってくれたブルーレッド・アジヨ・モータースポーツに、今シーズン初優勝を捧げたい。

そして……

『バスタージに勝ちたい！』

たくさんの人に支えられて、勝ちたいライダーバスタージに勝てそうなんだ。

今度は……俺が皆に！

実況：「おーっと！新垣飛翔！バスタージのスリップにつきました！しかし、つくのが遅い！曲がりきれるのか！？」  
坂谷：「曲がりきります。それが新垣飛翔だから」  
アゴスター：「いくらなんでもこれは無理でしょう……」  
キュレリー：「いける！飛翔！お前なら！」  
ジュイラーズ：「ラストバトルだ！」  
氷上：「頑張れ！飛翔君！」

飛翔は、スリップを使ってバスタージの横に並んだ。  
そこから、凄いブレーキングで曲がった。  
少し膨らんだが、すぐにバスタージのゆく道を塞いだ。

バスタージ：（くそ！前に出れない！）  
マルティニー：「嘘だろ！？」

実況：「新垣飛翔！ついにトップに躍り出た！」

その後もしつかりと内側塞いで、バスタージをブロックした。

実況：「ビクトリーコーナーを曲がった！さあ！新垣飛翔が帰って来た！もてぎの最終ストレートは、新垣飛翔のビクトリーロードとなったあああああああああ！」

『新垣飛翔！初優勝！！その舞台は地元日本だああああああああああ！！』

飛翔は思いっきりガッツポーズをした。

第24話 Last of Downhill straight (後書き)

次話！優勝した飛翔！パドックで優勝インタビュー受けたり！  
チームと話したり！氷上と話したり！

P.S.

間違えて今すぐ投稿にしてみました。  
今週の金曜日にも更新するので……

第25話 表彰式と旅立ち（前書き）

日本GP終了です！

## 第25話 表彰式と旅立ち

ついに初優勝を成し遂げた新垣飛翔。

パルクフェルメに戻ってきたとき、キュレリーたちと抱き合い、勝利を喜んだ。

キュレリー：「お前ってやつは……本当にすげーよ！」

ジュイラーズ：「よくダウンヒルストレートで行ったな！」

アゴスター：「もう感動したよ！」

ワノマール：「おめでとう！飛翔！」

ブルーレッドチームは、ものすごく喜んでる。

それに対して、バンクハーアスパは、バスタージの優勝時と同じで、冷静で静かだった。

マルティニーニ：「まあ、次がある。ポルトガルで勝てばいいだけだ」  
バスタージ：「はい」

3位にはチエートが入った。今シーズン2度目の表彰台だ。

ワノマールは、終盤にペースが上がらず、5位フィニッシュ。

4位には、以前飛翔がいたチーム、ローストのクデューリが入った。

〈最終ポイントランキング〉

- 1 . バスタージ 70
- 2 . 飛翔 61
- 3 . ワノマール 44
- 4 . クデューリ 37
- 5 . チエート 31

表彰式、ついに今シーズンバスタージ以外のライダーが、表彰台の1番高いところに入った。

日本のトロフィーにキスをして、大きく上に上げた。  
惜しめない拍手が飛び交う。

そして、もてぎに日本国歌が鳴り響いた。

その後も、noto2、notogpクラスも大熱狂で、日本GP  
は閉幕した……

空港で、今度はポルトガルに飛び立つ。氷上がお見送りに来てくれた。

氷上：「飛翔君。約束守ってくれてありがとうね。ポルトガルも頑張つて！応援してるから！」

飛翔：「おう！」

その会話の隣では、ブルーレッドチームの皆が笑いをこらえていた。

飛翔たちは飛行機に乗り、ポルトガルを目指した。

第25話 表彰式と旅立ち（後書き）

次話、ポルトガルへ！

## 第26話 大雨レース

日本GPを初優勝で終えた飛翔たちブルーレッドチーム。羽田空港から、次はポルトガル・エストリルサーキットを目指した。

自身初優勝から、次は2連勝！と意気込む飛翔たちだったが……

キュレリー：「まさかここまでとはな……」

飛翔：「まったくですね」

エストリルは、まさかの大雨。初のウェットレースとなりそうだ。

ピットでは、レースでの対策を考えていた。

ジュイラーズ：「飛翔はウェットレースは初めてなんだよな？」

飛翔：「はい」

ジュイラーズ：「だったら無理をせず、ポイントゲットを狙うべきだ」

飛翔：「でも……バスタージが……」

ジュイラーズ：「バスタージも慎重に走るだろう。問題は……ルキー勢だ」

飛翔：「ルキー勢？」

ジュイラーズ：「ああ。雨のレースになると、トップライダーは慎重に走るだろう？その隙に、下位のライダーは攻めていって、表彰台だったり、優勝を狙ったりするんだ」

飛翔：「ルキー勢に注意か……」

ジュイラーズ：「特に……ジュシーニ〓ジヨツシユは要注意だ」

ジュシーニ〓ジヨツシユ……そのライダーは、昨年のスペイン選手権王者のライダーで、その才能をたたえられ、バスタージやチェートのいる、バンクハースパーチームで走っているライダーだ。今シーズンは、慣れないマシンで苦しんでいたのだ。ウェットの今

回で一気にトップ争いに絡んでくる可能性がある。

ジュイラーズ：「色々とウェットは怖いからな。気をつけていけよ」

飛翔：「はい！」

そうアドバイスを受けた。

明日は予選日だ！

第26話 大雨レース（後書き）

次回、予選です。

## 第27話 大波乱の雨予選

ポルトガルGP予選日、今日も雨降りで、ウェットコンディションとなった。

飛翔はウェットレースが初めてという事で、慎重の走りをするようにといわれた。

数々のライダー達がコースへと出て行った。  
飛翔も出て行った。

ひとまずは、何回か走ってみて、ウェットレースはどういうものかを見てみる。

何も思わず走っていたら、タイヤが滑って危うく転倒という事になった。

キュレリー：「ひやひやするな……」

ジュイラーズ：「ウェットに関したら、ワノマールの方が安定しているな」

飛翔は現在6番手タイムと少し苦しんでいるのに対して、ワノマールは2番手タイムと好調だった。

バスタージは5番手タイムと慎重の走りを命令されんたんだろう。チエートはトップタイムを出している。思い切った走りの割には安定感がある。

バンクハースパーのジョッシュは3番手タイムだ。

キュレリー：「やっぱりジョッシュが来たな……」

ジュイラーズ：「チエートも引かないな……」

その後も、転倒が相次いだり、大波乱の予選となった。決勝にはどうなることやら……

さらには、チエート、バスタージ、ワノマールが転倒をしてしまったりした。

終盤、飛翔もタイヤが滑り転倒した。

だが、ジヨツシユは安定してタイムを出したが、わずかに及ばなかった。

予選最終結果

- 1 チエート
- 2 ジヨツシユ
- 3 ワノマール
- 4 バスタージ
- 5 クデューリ
- 6 飛翔

「天気予報です。明日は雨。一日中の降りますので、傘の準備を…

…」

キュレリー：「やっぱ雨が……」

アゴスター：「苦しい戦いになりそうですね……」

今シーズン初の雨のレースが幕を開ける……

第27話 大波乱の雨予選（後書き）

次話、決勝！

## 第28話 レインマイスターVSルーキー

決勝日。もちろんのこと雨が降っている。各ライダーがレインタイヤを履いて、グリッドで準備をする。

スペイン以来のポールポジションのチエートは、レース前の会見では、「そろそろ優勝して、バスタージや飛翔についていきたい」と話していた。

ジョツシユも、「ここで勢いに乗りたい」と言っていた。

予選時点で、かなりの転倒者がいるので、このレースはサバイバルレースとなりそうだ。

6番グリッドからスタートする飛翔は、雨のレースが初めてのため、慎重の走りが重要となった。

各ライダー、ウォームアップラップに出て行き、しっかりと路面の状況を確認した。めっちゃ滑るコンディションだ。

実況：「さあ！ グリッドに着きました！ 今シーズン初のウェットレース。ポルトガルGP……スタートです！」

シグナルが黒になり、一斉にスタートをした。

ジョツシユがいいスタートを切り、チエートがそれに続く。

飛翔は、4番手で1コーナーを曲がっていった。だが、真後ろにバスタージというプレッシャーがあった。

3番手にはワノマルが、グリッドのポジションを保って、走っていた。

各ライダー、慎重に走り、ペースも上げてない状況の中、ジョツシユとチエートは、思いつきり走っていた。すでに、3位ワノマルとも、2秒の差がある。

実は、チエートは、レインコンディションが大得意なライダーで、去年のフランスGPの雨のレースで、初優勝を遂げている。それ以来は勝てないが、今年はドライも速いので、注目を浴びていたのだ。

すると、1周目からいきなり転倒者が出た。

転倒したのはクデュリ。4番手スタートだったが、6位走行中に転倒してしまった。

これの影響によって、飛翔はバスタージとの一騎打ちになってしまった。

3位のワノマルは、単独走行で、楽な状況にはなっている。

実況：「坂谷さん。このレース、どう占いますか？」

坂谷：「ジョッシュもかなり速いですけど、経験のとしては……チエートの方が勝機があるかもしれませんね。しかし、ルーキーとというのは、何をしてくるか分かりませんからね。データも少ないですし」

そこらへんがルーキーの怖いところだ。どんな走りをするかが、理解できない。

早くも波乱のレースになってきたポルトガル。レースは中盤へ…

…

第28話 レインマイスターVSルーキー（後書き）

次話、チエートとジョッシュの戦いが激化します！

## 第29話 弱点勝負

大雨のレースとなっているポルトガルGP。序盤からルーキーのジヨツシユが飛び出すのに対して、それを追隨するレインマイスターのチエート。3位を単独で走るワノマール。4位争いを繰り広げるバスタージと飛翔。レースは更に激しさを増していく。

キュレリー：「しかし……これはチエートに勝機があるな」

アゴスター：「そうですね？ ジヨツシユもかなりいいペースだと思いますけど？」

ジュイラーズ：「そこが問題なんだ。ルーキーはタイヤのマナージメントがうまく出来ないんだ。去年のチエートが凄すぎるというものなんだ。チエートは気づいてないかもしれないが……あいつはもう立派なチャンピオン候補なんだ」

序盤からチエートに動きはなく、ずっとジヨツシユの後ろについて走行していた。これはジヨツシユの走りを観察しているのだ。普段トップ争いに絡んでこないライダーなので、どこのコーナーが速いか、どんな走り方をするのかをしっかりと観察しておく必要がある。ワノマールは安定したタイムで、バスタージたちを引き離している。

バスタージと飛翔は、最初から1回もポジションの入れ替えがなく、バスタージが4位、飛翔が5位の順番だ。現にチャンピオン争いをしている2人にとっては、1ポイントも重要なものなのだ。そのポイントをしつかりものにするために2人は慎重に走っている。

チエート：（見えた。ジヨツシユはこのシケインで急激にペースが落ちている。次ラップが勝負時だ！）

9コーナーのシケインがジヨツシユの苦手な部分であることに気づいたチエート。

そして次ラップ。ついにチエートが動き出した。

実況：「おーっと！　ここでチエートがトップに躍り出ました！」

チエートがついにトップに躍り出た。そしてレースは最終ラップ

へ……

チエートがそこからジヨツシュを引き離し、差を広げてゴールへと向かって行った。

実況：「今フィニッシュ！　ポルトガルGPはチエートが優勝です！　2位にジヨツシュ。3位にワノマール。4位はバスタージ。

新垣は惜しくも5位フィニッシュです」

## 第29話 弱点勝負（後書き）

次話、パルクフェルメで話し合いです。

第30話 ポルトガル表彰式（前書き）

30話達成！  
ですが、めっちゃ短いです。

### 第30話 ポルトガル表彰式

ついに今シーズン初優勝を遂げたチエート。  
ルーキーながら大健闘したジヨツシユに惜しめない拍手が送られる。

3位には安定した走りで行ノマールが入った。  
バスタージは4位。飛翔が5位となった。

マルティニーニ：「2人ともよくやった」

チエ&ジヨ：「ありがとうございます！」

マルティニーニ：「私のいうとおりに行ったら、もっと素晴らしいレースが出来たかな」

チエートはバスタージと違って、命令に従わず自由に走っている。  
ジヨツシユも同様に自由に走る方を選択したのだ。

そこにワノマールがやってきた。

ワノマール：「おめでとう！ いいレースだったようだね」

ワノマールが祝福に来た。ワノマールも今シーズン2度目の表彰台で気分はいいようだ。

そして表彰式。

3人がトロフィーを貰い受けた。

このレースは今シーズンの主力が抜けたレースとなった。これらのレースを大きく変えるだろう。

そして、イタリア出身のチエートが優勝したので、エストリルにイタリア国歌が流れた。

キュレリー：「次はフランスだ！ 高速コーナーと中速コーナー、低速コーナーすべてが揃ったコースだ。気を引き締めていくぞ！」

『おー！』

次はフランスだ！

第30話 ポルトガル表彰式（後書き）

次話、フランスへ！

### 第31話 フランス開幕！

今回の舞台はフランス、ルマンサーキットでの開催。ルマン24時間耐久レースでとても有名なサーキットだ。そしてメインは何といても第1コーナーの超高速コーナー。もちろん飛翔は初挑戦のサーキットだ。

前戦優勝のチエートは、初優勝を遂げた大好きなサーキットで2連勝を狙う。

ランキングトップのバスタージは、2戦優勝から離れているので3勝目を挙げたいところ。

大雨で有名なサーキットだが、今日は快晴でドライコンディションとなった。今から予選が始まる。

キュレリー：「よし！ 今から予選だ。皆も分かっているとおり、今日はとても暑い。タイヤの消耗も激しいからしっかりピットインのタイミングを計るように」

キュレリーからの指示を受け、2人はコースに出て行った。

一方、バンクハースパーチーム。

マルティニーニ：「今回はストレート重視のセッティングにした。

新垣やワノマールの後ろにつけたら、いい感じにスリップストリームが効く。それを利用していけ」

バスタージ：「分かりました」

相変わらずバスタージはマルティニーニの命令によって走る。チエートとジョッシュは自分の走りをするようだ。

各ライダーがタイムアップをしている中、バスタージは飛翔の後ろにぴったりつけて走っていた。

飛翔：（スリップ狙いか……）

今は最終セクション。もうすぐフィニッシュラインなのだが……  
飛翔はピットインしていった。これでバスタージはスリップを使  
う相手がいない。

だが、バスタージもピットインしてきた。

その後、サーキットに出て行くと、またバスタージが付いてくる。

飛翔：（このままタイムを出すしかないのか……）

諦めた飛翔はアタックし始めた。

超高速コーナーをしっかりと曲がっていく。

だが、スリップにつかれているため、なかなかストレートスピ  
ドが伸びず、タイムが上がらなかった。

そのまま予選は終了した。

〈最終予選結果〉

- 1 バスタージ
- 2 チェート
- 3 ジョッシュ
- 4 ワノマール
- 5 飛翔
- 6 クデューリ

キュレリー：「明日はいかにアスパーチームについて行くかが重  
要となってくる。しっかり着いていけよ！」

飛&ワ：「はい！」

明日は決勝だ！

第31話 フランス開幕！（後書き）

次話決勝です。

### 第32話 激闘！ フランスGP！

決勝日、天候に恵まれ、ドライコンディションのレースとなった。バンクハーアスパークがフロントロウを独占し、ストレートスピードでの対決となりそうだ。

各ライダーがウォームアップを走り終え、グリッドついた。

実況：「第5戦フランスGP……スタートです！」

各ライダーが一齐にスタートを切った。バスタージが飛び出したかと思ったら、後ろからワノマールが飛び出し、トップで第1コーナーを抜けていった。その後ろにバスタージがつけ、ジョツシュ、飛翔、チエートがついた。

すると第3コーナーのシケインでバスタージがワノマールをパスした。

数周して、トップ集団はバスタージとワノマール。3番手表彰台争いはジョツシュと飛翔とチエート。どっちのグループも激しい争いをしていた。

キュレリー：「おー、ワノマール調子いいな」

アゴスター：「朝のウォームアップ走行トップタイムでしたからね！」

今日の朝に行われたウォームアップ走行でワノマールはトップタイムをマークし、いいセッティングをみつけたのだ。

一方飛翔も、6コーナーでジョツシュをパスし、3番手に上がっていた。

後ろから地元のカデューリが追いついてきて、3位争いは4人で

の争いとなった。

そしてクデューリが5位に落ちたジヨツシユを抜こうとしたとき

……

実況：「あーっつと！ クデューリ転倒！ ジヨツシユも追突される形で転倒してしまいました！」

何とクデューリがジヨツシユを追突し、2人が転倒してしまった。これでクデューリは2戦連続でノーポイント。ジヨツシユは今シーズン初のノーポイントとなってしまうた。この転倒の影響で3番手争いは飛翔とチエートになった。

変わらずトップを走るバスタージはワノマールをなかなか引き離せず、苦戦していた。

アゴスター：「しかし……何でワノマールはバスタージを抜かないんでしょうね？ ペースもワノマールの方が圧倒的に速いのに……」

キュレリー：「……」

そう言ってワノマールは一回ピットの方に入っていた。

ジュイラーズ：「キュレリーさん」

キュレリー：「ああ。ワノマールは……まだ引きずってるな……」

そのままレースは終盤へ……

第32話 激闘！ フランスGP！（後書き）

次話、フィニッシュ！

勝つのはバスタージか、それともワノマルか……？

### 第33話 抜かないレース

ルマンサーキットで開催されているフランスGP。序盤からバスタージが好調で走る中、それを追いかけたのはブルーレッドのワノマール。3位争いは飛翔とチエートに絞られたレース展開となった。

もうあと5周。ワノマールの方がバスタージよりペースがいいのに、ワノマールは抜けずにいた。バスタージがブロックラインを走行しているわけでもない。

アゴスター：「なんで抜かないんだ。抜いたら確実に勝てるのに……」  
キュレリー：「……」  
キュレリーはそれを黙って見ているしかできなかった。

一方3位争いは白熱した展開になっていた。残り4周の第1コーナーでチエートが飛翔のスリップについて追い抜いた。その後、負けじと飛翔が2コーナーのシケインで抜き返した。

そんな戦いは最終ラップまで続く……

最終ラップ、ワノマールはバスタージのインを伺うも入らなかつた。

その後も、その後も抜かなかつた。

そして最終コーナー……

ワノマール：（ここで……ここで抜かなきゃいけないんだ！）

実況：「さあ！ ワノマールがインを伺う！ しかし抜かない！」  
「  
またもやワノマールは抜かなかつた。」

レースはそのまま終了。バスタージの今シーズン3勝目。ワノマールは2位で終わった。

白熱した3位争いは飛翔が制し、4位にチエートとなった。

実況：「いや、今日も実にすばらしいレースでした。しかし、ワノマールはなんで抜かなかったのでしょうか？」

坂谷：「いろいろあるんですよ。ワノマールも、バスタージも…

…」

次戦はカタールニヤGP。バスタージの地元中の地元といっているくらいの場所だ。

その地で各ライダーがバスタージに挑む！

第33話 抜かないレース（後書き）

次話、カタルーニャGP！

**第34話 まさかの来客登場！（前書き）**

今話からカタルーニャGPスタートです！

### 第34話 まさかの来客登場！

第6戦の舞台はスペイン・バルセロナの近くにあるカタルーニャサーキットでの開催。様々なドラマを生んできたこのサーキットで、今シーズンもレースが開幕する。

今から予選なのだが、ブルーレッドチームには驚く来客がいた。

坂谷：「おつす、飛翔」

飛翔：「坂谷さん！？」

坂谷一樹さかたにかずき。かつての125ccのチャンピオンで、125ccクラスで走る日本人ライダーは、必ず憧れる存在だ。

キュレリー：「おー、坂谷か。久しぶりだな」

坂谷：「お久々」

飛翔：「……2人とも知り合いなんですか？」

ジュイラーズ：「そんなのも知らない世代か。若いな飛翔は」

飛翔：「へ？」

ジュイラーズ：「90年代、125ccを盛り上げた3強時代があったんだ。その3人は誰がチャンピオンになってもおかしくないほどにな。1人は坂谷。2人目がキュレリーさん。そして3人目がマルティニだ」

80年代後半から90年代前半までは、ある3人が繰り返しのようにチャンピオンになっていた。1987年から1996年までがその時代といわれ、それぞれ3人が3回チャンピオンを取るという激戦の時代だったのだ。坂谷もキュレリーもマルティニも、皆走りがアグレッシブで、ファンを熱狂させたのだ。

飛翔：「もしかして坂谷さんって……想像以上に凄い人！？」

ジュイラーズ：「ああ、歴史に残る名ライダーだな」

ともかく今から予選が始まる。各ライダーが一斉にスタートしていく。

カタルーニヤサーキットの特徴は、抜きどころが少なく、ホームストレートが1kmを超えるとこるだ。フィニッシュラインが手前にあるため、最後のストレート勝負は難しいが、抜きどころが少なだけにコーナーごとの戦いが迫力を増す、そういったサーキットだ。

もちろんこのコースも飛翔は初体験。テクニカルなコースだけになかなかタイムが上がらなかった。

キュレリー：「ん、マシンのセッティングがうまくいってないか？」

飛翔：「僕の経験も原因の1つだと思いますが……少し乗りづらいですね」

坂谷：「おい飛翔。フロント少し下げってみろ」

飛翔：「はあ……」

とりあえずフロントを下げてみた飛翔。それでサーキットに出て行った。

坂谷からのアドバイスでマシンは凄く機能し、好タイムが刻めた。

～最終予選結果～

1 バスタージ

2 飛翔

3 チェート

4 ワノマール

5 ジョッシュ

6 クデューリ

その好感触でも圧倒的な速さのバスタージ。

果たしてやぶれるのか……

そして決勝の日が訪れる……

**第34話 まさかの来客登場！（後書き）**

次話、決勝！

最速バスタージに勝てるのか……？

すいません！

間違えて今すぐ投稿にしてしまいました！

今週の金曜日にも出来たら更新します。

### 第35話 カタルーニャ決勝！（前書き）

前話は僕のミスにより早くに更新してしまい申し訳ございませんでした。

### 第35話 カタルーニヤ決勝！

決勝当日、バイクレース大熱狂の地スペインであるだけに10万人もの人々がレースを見に来ている。気温も高くなってきたこの時期に白熱のレースが展開される。

実況：「さあ開幕です。第6戦カタルーニヤGP。実況はいつもの通り寺野がお送りいたします。解説は坂谷さんがカタルーニヤを訪れているという事で、しもたさがる下田退さんをお願いします。よろしく願いします」

下田：「お願いします」

寺野：「今シーズン日本からして注目なのは新垣飛翔ですよ」

下田：「そうですね。彼は昨シーズン本当に苦しいシーズンでしたからね。今シーズンは初優勝も成し遂げ、このカタルーニヤGPもバスタージ選手に次ぐ2番手でしたから期待したいです」

寺野：「さあ、カタルーニヤGP、まもなく開幕です」

ブルーレッドチームは坂谷をゲストサポーターとして招きいれ、レーススタートとなった。

去年のカタルーニヤは、バスタージの独走優勝で、2番手のグラントに1.5秒の大差で勝ったという劇的な勝利だったのだ。そういうことを考えるとバスタージの本当に得意なサーキットといえる。一昨年のバスタージがルーキーイヤーの時もここで初優勝を成し遂げている。

各ライダーがグリッドについてレースの準備を進める。

キュレリー：「いいか飛翔。バスタージとの予選タイム差は0.7秒。とても適うタイムじゃない。でも……ここで勝てば何かが変

わるかもしれない」

坂谷：「だね〜。ここで勝ったら変わるよ。あいつとあいつが」

飛翔：「はあ……………」

各ライダーがウォームアップラップに入り、路面コンディションなどを確認してからグリッドについた。

寺野：「では行きましょう！ 2012年シーズン第6戦カタル

ーニャGP125ccの決勝……………スタートです！」

信号が黒色になり、ライダーたちは飛び出していった……………

**第35話 カタルーニヤ決勝！（後書き）**

次話、大波乱のレースが繰り広げられる。

### 第36話 カタルーニヤの最速バトル!

信号が黒色になり各ライダー一斉にスタートを切った。飛翔がいスタートを切り、トップで第1コーナーを旋回していった。その後ろにはカタルーニヤ2連覇中、地元中の地元のバスタージがせまる。

オープニングラップから鋭く攻めてくるバスタージ。飛翔も負けずに攻撃態勢のラインで走り、バスタージを迎えうつ。

その後5周したところで、飛翔とバスタージのトップ争い。3位表彰台争いにチェート、ワノマール、ジョッシュの3人でのバトルとなった。

現在は6周目。まだまだレースは序盤だ。路面温度も上がってきて、タイヤのマネージメントが大切になってくる。

そしてその週の第10コーナー……

寺野：「さあ！ インを伺うバスタージ！ 新垣は抑えられるか……！？」

飛翔は抑えることができず、バスタージを前に行かせてしまった。下田：「バスタージは飛翔君よりもペースはかなり速いですから……すぐ抜き返すか、ついていくかしないと優勝は難しいです」

もちろんのこと、バスタージはそれから飛翔を引き離そうとペースを上げていった。毎年見せる劇的な独走優勝を今年もする気だ。そのまま引き下がるのが嫌だった飛翔は、バスタージの走り方を後ろから研究し、走りコピーしてバスタージについていった。するとバスタージもなかなか逃げれない状況になってきて、ペースを落として、無理なく戦うことを決めたようだ。

一方3位争いで1番ペースが上がっているのは、ルーキーのジョツシュ。現在は5番手走行だ。この3番手争いは、争いの先頭に立っているチエートが思うようにペースが上がっておらず、2人の進歩を塞ぐ形となっている。

そこで疑問が出てくる。どうして今回もワノマールがパスしないかだ。今回もワノマールの方が圧倒的にペースがいい。それでも抜かない。

その状況はジョツシュを相当腹立たせる状況となった。その周のバックストレートという、フィニッシュラインがあるホームストレートとは違う場所にあるもう1つのストレートで、前を走る相手の空気抵抗を利用して前に出るといふスリップストリームという技法を使って、ジョツシュはワノマールの前に飛び出した。

更にその後のホームストレートでもチエートをパスし、ジョツシュは表彰台圏内の3番手を走行する形になった。

激しさを増すカタルーニャGP。レースは後半へ……

### 第36話 カタルーニヤの最速バトル！（後書き）

この間、感想をいただいたときに、

「バイクの事を知らない人でも分かりやすく！ 質問しなくてもいいように」

という指摘を受けました。

ということとで、僕みたいなマニアくらいしか分からないかなという単語を、これから後書きに1つずつ書いていきます。

もちろん、これまでのお話で出た単語です。

「スリップストリーム」

・前を走るライダーの空気抵抗を上手く使って、前に出る技法です。作品内では、略して「スリップ」と書いてることが多いです。

次話、激しさを増すカタルーニヤ。

ついに熱いバトルが始まる……？

### 第37話 スパート

前半からトップを快走するバスタージ。それを逃がすまいと追隨する2番手走行の飛翔。バスタージは飛翔がなかなか離れないので無理をせずにレースを展開するような雰囲気を見せた。

一方3番手争いはジョツシユが少し抜け出した感じになり、3番手を単独走行。3番手争いは4番手争いに変わり、チエートが4位走行、ワノマールが5位走行。

激しさを増すカタルーニヤ。レースは後半を迎えた……

\*

トップ争いはさつきから変わらずバスタージが先頭、飛翔が2位。残りは5周。ここでついに……

実況：「さあ！ このホームストレートで新垣がトップに立った！」

残り5周のところのホームストレートで飛翔がバスタージのスリップストリームについて抜いた。

キュレリー：「よし！ 抜いたぞ！」

アゴスター：「ここからスパートですね！」

そう、飛翔はスパートをかけるためにバスタージをパスしたのだ。ここからバスタージを引き離しかかるといっても難しいことでしょうとした。しかしその後の第4コーナーで……

実況：「今度はバスタージが第4コーナーで抜いていった！」

下田：「さすがバスタージ。綺麗なコーナリングですね」

今度はバスタージがスパートをかけるために前に出た。飛翔も必死で追うがその速さは尋常じゃなかった。ものすごい勢いで飛翔を引き離し、1秒の差をつけてしまった。

実況：「バスタージと飛翔の差は1秒前半まで開きました。下田さん。これは飛翔に勝機はあるんでしょうか？」

下田：「もう難しいでしょうね。バスタージはサーキットレコードを更新する速さですから……」

アゴスター：「はあ……もうダメですよね？」

ジュイラーズ：「難しいだろうな。でも……」

キュレリー：「ああ、難しいだけであって勝機がなくなっただけではない」

坂谷：「大丈夫！ あいつなら……」

『ミラクルを起こす！』

残りは3周。飛翔もバスタージと同等のタイムを刻んでいるが、スパートをかけるタイミングがバスタージの方が良かったため、その1秒という差は縮まることも広がることもなかった。

バスタージ：（これで決まったな。新垣はもう追いつけない）

その周をスパートをかけているときのタイムでその周を走った。その時、ピットスタッフが慌ててサインボードに指を指していた。

『N i g a k i + 0 , 5』

この意味は新垣飛翔が0.5秒差に迫っているという意味だっ

た。

ホームストレートで後ろを確認してみると、さっきよりも大きく飛翔が見えた。

バスタージ：（嘘だろ！？）

残り2周。そのときもスパート状態で走り、バスタージはとっても速いペースだ。

そしてホームストレートに帰って来ると……

『N i g a k i + 0 / 1 』

更に詰められていた。

バスタージ：（何故だ……何故こんなに速いペースで走っているのに差を詰められる！？）

そして最終ラップ直前のホームストレートで飛翔はスリップストリームについた……

### 第37話 スパート（後書き）

次話、激戦のカタルーニャ決着。  
最終ラップで勝つのはどっちだ!?

「グリッド&ポールポジション」  
・グリッドというのはスタートする位置です。予選でコースを走り、タイムのいい順から前の方からスタートします。1番前のグリッドをポールポジションと言います。

### 第38話 決着・カタルーニヤの激闘

サーキットレコードを更新しながら走行するバスタージ。その速さは目にも留まらぬはずなのに追隨してくる飛翔。最終ラップ手前ではもう完全に追いつかれ、スリップにつき、パスしようとしていた。

勝負はラストラップへ……

\*

飛翔は最終ラップに入るストレートでスリップにつき、その後の第1コーナーでパスをしようとした。しばらくするといい感じにスリップが効いてきて、スピードがどんどのつてくる。

実況：「さあこの第1コーナー、新垣飛翔がトップに躍り出た！」

下田：「綺麗なコーナーリングです」

だが、そのコーナーで並んだまま走ってきたバスタージに2コーナーでパスをされて、3コーナーはバスタージに抑えられてしまった。

その後の第4コーナー、また飛翔がバスタージをパスした。だがまたバスタージがアウトから追いかけてくる。

その後の第5コーナーでまたバスタージが抜いていった。

実況：「またバスタージが行ったー！」

下田：「ここの第5コーナーは非常に難しいコーナーなんですよ。ここで抜けるという事はバスタージもまだまだポテンシャルありますね」

アゴスター：「しかし……なんで飛翔は追いつけたんですか？」

坂谷：「さすがアゴスター君。新人まるだしだな」

キユレリー：「坂谷。アゴスターをからかうな」

坂谷：「はいはい。タイヤのマナージメント力だよ」

アゴスター：「タイヤのマナージメント？」

坂谷：「これはあくまで推測だけだね、バスタージがスパートをかけたとき飛翔はスパートをかけるのをやめたんだ。そこからあえて残り4周からスパートをかけ始めた。それに気づかなかったバスタージはどんどんタイヤを消費して走った。そう考えると今はどうだ？　タイヤの力が残ってるのは？」

アゴスター：「飛翔君ということですか！」

坂谷：「その通り！」

\*

その後の第6コーナーから第9コーナーは他のライダーが誰も抜こうとはしないコーナーが続く。

坂谷：「やはり最大の勝負どころは……バックストレートエンドだな」

数周前にジョツシユがワノマールをパスしたコーナー、第10コーナー。バックストレートというだけあってスリップストリームがきく。その後の10コーナーが最大の勝負どころとなる。

飛翔はバスタージのスリップについた。だが……

飛翔：（くそ！）

ジュイラーズ：「見事にイン側を塞いでやがる」

アゴスター：「これじゃあ抜けないじゃないですか！」

この10コーナーで飛翔はバスタージをパスすることが出来なかった。この後にはもう最大の勝負どころはない。

アゴスター：「ここまでか……」  
キュレリー：「……」

バスタージの後ろにつくも、11コーナー、12コーナーではもちろんパスできなかった。誰もが諦めかけたその時……

実況：「ああと！ 新垣飛翔がインを伺って…… トップに躍り出たあああああ！」

その実況を聞いたときブルーレッドチーム全員がテレビにかじりつけになった。

飛翔は最終ラップ最終コーナーでバスタージをパスしたのだ。誰もが諦めたというのに、本人は全く諦めていなかった。

実況：「第6戦カタルーニヤ、劇的な逆転勝利！ 新垣飛翔2勝目！ 最強バスタージを抑えての優勝です！」

地元の人たちはもちろんバスタージに勝ってほしかった。でも熱いバトルに観客からは大歓声が聞こえた。

### 第38話 決着・カタルーニヤの激闘（後書き）

次話、パルクフェルメで話し合い。そこでバンクハーアスパアのオーナーマルティニーが……？

「パルクフェルメ」

・レース後、インタビューなどを受ける場所です。表彰台に上る3人がそこに行き、インタビューなどを受けた後、表彰台へと上ります。

チームスタッフと歓喜にわくことも出来ません。

### 第39話 マルティニーの過去

劇的な飛翔の逆転優勝で幕を閉じた125ccクラスのカタルーニヤGP。そしてもうすぐ表彰式が行われようとしていた。今はパルクフェルメでインタビューなどを受けている。

そこで、バンクハースパーチームのオーナー、マルティニーが大声を上げて怒鳴っていた。

「バスタージ！ 何だあのレース展開は！」  
「……………」

そう、最終ラップのバスタージの元気な走りは命令違反だったのだ。命令では、最終ラップにバスタージ抜かれることはまず分かっていたマルティニー。そこでマルティニーは第1コーナーでは普通に抜かせて、バックストレートエンドで抜いて優勝を持つていくという命令だった。

そしたらバスタージは、意地になってコーナーごとにポジションが変わるようなレースを展開してしまった。

周りのライダーやメカニック、マスコミはシーンとしている。

（俺だって分からないよ。何であんなレースをしてしまったんだ。あんなアグレッシブなレース展開はこのチームは望んでいないはずなのに…………）

バスタージもよく分からなかった。

「もう話してもいいんじゃないか、マルティニー」  
「何!？」

話しかけたのは飛翔とワノマールのチームオーナー、キュレリーだった。かつて共にレースで戦った仲だ。

「お前には関係ないだろうキュレリー！」

「いいや、関係あるね。そして俺にも。まあ、観客からすれば俺は

あのレース好きだったけどな」

そう言って話しかけてきたのは坂谷だった。坂谷の姿を見て、周りはみんな驚いた。「あの時の3強がここに揃って話しているぞ！」  
マスコミからはそんな声が聞こえてくる。

「坂谷……お前、来てたのか」

「まあね。解説は下田さんに任せてきたから。それより、俺も思う。バスタージに話してやってもいいんじゃないか？ バスタージだけじゃなく、チエート、ジヨツシユもな」

どうやらバンクハーアスパークチームのみんなが聞いたほうがいい話らしい。カタルーニヤで初表彰台を獲得したジヨツシユがバスタージたちの元へとやってきた。そして4位フィニッシュでチームメイトを祝福に来ていたチエートもバスタージの所へやってきた。

「準備は整ったぜ。あとはマルチーニ次第だ」

「……分かった。話そう」

そう言ってマルチーニは過去の事について話し始めた。

「それは125ccの3強時代が終わった時の翌年。キュレリーや坂谷はそれっきりで引退してしまったが、俺だけは250ccクラスに昇格した。最初からいいバイクに恵まれて開幕戦からどんどんアグレッシブに攻めていったよ。だがその年のカタルーニヤ。当時250ccでチャンピオン争いをしていたファルガス。俺はそいつに12ポイント差で追いかけていたんだ。結局はそいつと争うことになったんだが……おれがアグレッシブに攻めすぎたせいでファルガスを追突してしまった。更にファルガスは骨折をしてしまった。それ以来だよ。アグレッシブな熱いレースはもうやらないうちで思っただのは……」

「オーナー……」

「だからこれからのレース界の原石となるお前達をこんなところで

失敗させたくなかった。すまない。バスタージ、チエート、ジヨッ  
シユ

マルティーンはその場で深く頭を下げた……

### 第39話 マルティニーの過去（後書き）

お気づきかもしれませんが、こういったレース展開以外ではセリフ前の名前を消していこうと思います。

次話40話達成！ その上ターニングポイントです！

「高速コーナー」

・とても速いスピードで曲がるコーナーです。大体170km/h 200kmくらいでしょうか。

## 第40話 新たなバスタージ（前書き）

カタルーニヤGP終了！

そして40話達成！

まだまだ頑張っていきます！

では、40話どうぞ！

## 第40話 新たなバスタージ

過去の影響で、マルティーニはバスタージたちに危険がないような走行を命令していた。それを打ち明けたマルティーニは深く頭を下げている。バスタージもチエートもジョッシュも表情が寂しげだ。その沈黙を破ったのはチエートだった。

「あの……マルティーニさん」  
「何だ？」

「実は僕……マルティーニさんに憧れてレース界にやってきたんです。親父が根っからのレース好きで、マルティーニさん、キュレリさん、坂谷さん、3人の最大の勝負となったラストシーズンのカタルーニヤのビデオを借りて観たんです。その時、激しいライディングで攻めていくマルティーニさんに憧れて、ポケバイから始めて、今に至ったわけです」

「そうだったのか……」

マルティーニの表情は嬉しさと悲しさが混じっていた。

「だからお願いがあるんです。僕にあのライディングを教えてください！」

チエートはその場で頭を下げた。

それについてジョッシュも「お願いします！」と言って頭を下げた。

マルティーニはもちろんだと嬉しそうにうなずいた。

そのあと、バスタージがマルティーニのところに来てきた。

「バスタージ……」

「マルティーニさん。俺も自由に走っていいですか？」

「……当たり前だろ。だがこれだけは言うておく。3人とも……怪我するんじゃないぞ」

『はい！』

「分かったならこれから表彰式だ。上がってこい」

飛翔、バスタージ、ジョッシュの3人は表彰台へと昇った……

そして表彰式。

カタルーニヤGP125ccは飛翔の優勝となった。1位の飛翔がトロフィーを貰った後は、シャンパンファイトをする。

だが3人とも未成年なので、シャンパンは使えさせてもらえず、手に持っていた水で掛け合っていた。

その時、バスタージが飛翔を呼んで、話した。

「新垣。俺は今までバイクレースを楽しいなんて感じたことがなかった。負けても悔しいなんて感じたことなかった。でも、今日は負けたことがすごく悔しい。そして、そのバトルがすごく楽しかった。これが、レーサーというやつなのか？」

「そうじゃないか？ 俺もすっごく楽しかった！ 次も負けねえぞ！」

「ばかか。次戦勝ってチャンピオンになるのは俺、バスタージだつて」

「いいや、新垣飛翔だね！」

2人が言い合っている中にジョッシュが入ってきた。

「言い争うのはやめてください！ チャンピオンになるのはどうせ僕なんですから！」

飛翔とバスタージは、思いっきりジョッシュに水をかけた。

大笑いが聞こえた表彰式だった。

それに、次戦からはもっと苦しい戦いになるはずだ。新たに心の強さを手に入れたバンクハースパーチーム。チャンピオンへの道は遠い……

## 第40話 新たなバスタージ（後書き）

次話、伝統のサーキット、オランダ・ダッチTTアッセンへ！

「テールトゥノーズ」

・前にいる台車と後ろにいる台車がくつつきそつな距離のことです。テールは尻尾、ノーズは鼻。つまりは尻尾と鼻がくつつきそつなほどの距離だ、ということですよ。

## 第41話 伝統サーキット

第7戦の舞台はオランダ。TTアッセンサーキットで開催される。バイクレースが始まった1949年からずっと開催され続けている伝統サーキットで、今年も激しいレースが行われる。

しかし、今年もオランダ独特の気候でライダーたちが混乱する。

「ダッチウエザー」

オランダ特有の気候で、雨が降ったり止んだり、目まぐるしく天気が変わっていく。

何が難しいかというと、タイヤ選択が難しくなってくる。

レースには、スリックタイヤという晴れよりの溝のないタイヤ、レインタイヤという雨用の溝付きのタイヤ、自らスリックタイヤに溝を付けたカットスリックタイヤがある。

こういった天気では、晴れているが路面が濡れたままというコンディションが多い。つまりは、レースをしている間にだんだん路面が乾いてくるのだ。

この状況で、スリックタイヤを選ぶと、序盤は路面が多く濡れているために滑りやすく、マシンも思いつきり寝かせれない。そのかわりに、乾いてくる後半は速さが出てくる。

レインタイヤを選ぶと、序盤は爆発的に他ライダーと差をつけれるが、後半になると乾いてくるので、巻き上げる水がなくなるため、ペースが極端に落ちる。

カットスリックタイヤはどちらにもある程度対応できるものの、爆発的な速さが出ない。

本当にタイヤ選択が難しい。

今から予選が始まる。

今は晴れていて、ライダーたちは今のうちに！ と、たくさんのライダーが一気に出て行った。

もちろん路面も乾いているので、全ライダースリックタイヤで走る。

飛翔たちも、他ライダーと一緒に今のうちに走っておこうという作戦に出た。

そしてしばらく走ると……

「やばいな……雨が降ってきた」

外で状況を確認していたジュイラーズが雨が降ってきたと言う。

コースでも、レッドクロスフラッグという雨が降っていることを示すフラッグが振られていた。

各ライダーピットに入ってきて雨の様子を見る。

しかし、止むことはなく、晴れているうちに出したままのタイムがグリッドとなった。

〈最終予選結果〉

- 1 バスタージ
- 2 チェート
- 3 飛翔
- 4 ワノマール
- 5 ジョッシュ

そして天候は安定しないまま決勝へ……

## 第41話 伝統サーキット（後書き）

次話、決勝開幕！

注目の天気とタイヤは……？

「シケイン」

・コース上にある急カーブ、障害物です。スピードを出しすぎないためにあり、勝負どころでもあります。

## 第42話 まさかの脱落

オランダGP決勝日は、生憎の路面がだんだん乾いてくるコンディションとなった。朝に降りだした雨だったが、今は曇り。タイヤ選択か鍵となってくる。

ブルーレッドチームでは2人ともスリックタイヤを選択し、序盤の慎重な走り、後半の勢いのある走りが要求された。

バンクハーアスパークチームは、バスタージとチエートがスリックタイヤ、ジョツシユがカットスリックタイヤを選択して、グリッドへとついた。

「さあ始まりました！ 2011年オランダGP。実況の寺野です。生憎のウェットコンディションでレースはスタートします。解説はおなじみ、坂谷さんです。よろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

「坂谷さん、このだんだん路面が乾いてくるコンディションでは、どのタイヤがいいんでしょうか？ 坂谷さんだったらどうしますか？」

「僕だったらスリックタイヤを選択しますね。今の天気状況から考えると、それがいいと思います。しかし今の空を見ても曇っていますよね。そこから雨が降ってくるとなると、もうスリックタイヤ勢には勝機がなくなり、逆にこのまま晴れ続けるとレインタイヤ勢に勝機はないです。安全をねらってカットスリックもありでしょうね」

「なるほど。そんな難しい決勝レース、まもなく開幕です」

各ライダーはグリッドに着いて準備を始めていた。ウェットレースというこれから雨が降ろうが止もうがレースを一時中断することはないという宣言がされている。

そしてウォームアップ走行が終了し、決勝レースが始まるうとしていた。

「2011年125ccクラス決勝、第7戦オランダGP、伝統のアッセンサーキットでのレース……スタートです!!」

各ライダーが一斉に飛び出していった。

いいスタートを切ったのはレインタイヤという賭けに出たクデューリ。2位にはカットスリックのジョツシュ。スリックタイヤ勢は下位の方に沈んでしまった。

1周目から勢いよくトップを快走するのはクデューリ。すでに2位のジョツシュから2秒の差がついていた。そこからフル参戦2年目のトウエルブレッシングチームのビスラークがつけていた。

ビスラークは昨年がいいパフォーマンスを見せていたのだが、シーズンが始まる前のテスト走行で、全治5ヶ月という大怪我を負ってしまい、このオランダGPが今シーズンの初レースとなってしまうライダー。

5周目、クデューリは後ろからすごく差をつけて走っていた。3番手争いにはジョツシュとビスラーク。飛翔やバスタージといったスリックタイヤ勢は8番手あたりを走っていた。

するとその周に、信じられないことが起きた。

「あつと、一台転倒です。ん……これはバスタージか?」

何とバスタージが転倒してしまったのだ。マシンが壊れてしまい、復帰は不可能となってしまった。

ポイントリーダーがリタイヤして始まったオランダGP、レース

は中盤へ

## 第42話 まさかの脱落（後書き）

次話、中盤戦です。

ここの単語紹介は分かりにくそうな単語は全て発表しました。これからは作中に解説を交えてやっていきたいと思っています。これまでの話の中で、まだ分かりにくい単語があれば、報告をお願いします。

また後書きで書かせていただきますので。

### 第43話 ブルーレッドの悲劇

ポイントリーダーバスタージのまさかのリタイヤで、大波乱となつているオランダGP。

現在はレインタイヤでトップを快走しているのはクデューリだが、7周を終えたあたりで、キュレリーは飛翔とクデューリのラップタイムを見て、あることに気づいた。

「……路面が乾いてきたな。飛翔たちの方がラップタイムが速い」

さっきの周回では、クデューリより飛翔の方が0.5秒ほど速かった。つまりは路面が乾いてきて、ドライコンディションになりつつあることだ。

今がチャージするところだと思ったキュレリーは、飛翔にペースを上げ、どんどん攻めていくように指示した。

飛翔はそれを理解し、どんどん攻めていくようにした。

……しかし。

「あああつと！？ これはブルーレッドのマシン……新垣です！  
新垣飛翔が転倒を喫してしまったああ！」

なんと飛翔が転倒を喫してしまったのだ。理由はと言うと、タイヤが滑ってしまい、転倒してしまった。

その転倒を目の前で見たワノマルは攻めるのをやめ、落ち着いて走ることにした。

そんな時にチャージを続けたのはチェートだった。

雨のコンディションが非常に速いチェートは、逆にチャンスだと思ひ、一気に前に接近していた。

チエートはあっという間に、2番手のジヨツシュまで追いつき、あっさり抜いて、1番ペースが落ちているクデューリにもあっさり追いついてしまう。

そしてチエートはあっさりとトップに躍り出て、一気に差をつけていった。

一方、ワノマールは、またあきらかに自分よりペースが遅い、ビスラークやジヨツシュを抜けずにいた。

次第にジヨツシュとビスラークもクデューリに追いつき、あっさりとは抜き去ってしまう。

だが、ワノマールはクデューリを抜けずに、どんどん順位を落としていった。

終盤に向けて順位は、1位を快走するのはチエート。2番手争いで、2位にジヨツシュ、3位にビスラーク。4位にはセルガがつけていた。

クデューリは15番手まで落ち、抜けずにいるワノマールは16番手。ポイント圏外のポジションを走行していた。

それに対して、キュレリーとジュイラーズは黙って見てるしかなかった。

アゴスターはとても不思議そうに見ている。ピットに戻ってきた飛翔もだ。

そしてレースは終盤へ

### 第43話 ブルーレッドの悲劇（後書き）

次話、オランダGPフィニッシュ！

P  
S

間違えてすぐに投稿にいてしまいました。  
すいませんが明日は休載します。  
本当にすいません。

## 第44話 復帰とルーキー

レースは終盤。

中盤からうまく抜け出したチエートがトップを快走している。もうチエートは、確実にゴールするためにペースを落とし始めている。

熾烈になっているのは2位争いだ。

注目のルーキーライダージョッシュと、大怪我から復帰したビスラーク。

ビスラークというライダーは、昨年にルーキーとして出場したが、いいマシンが貰えずに、苦しいシーズンを送っていた。

それが今年には、マシンが良くなり、期待もされていたのだが、大怪我というものにあっつてしまい、みんなはがっかりしたという。

そんなビスラークには、まだ表彰台経験がないため、いきなり表彰台獲得のチャンスを手に行っているのだ。

「いや、坂谷さん。なんだか今回は、あまり上位に来ないようなライダーが上位にいますね」

「そこら辺が雨のレースの面白いところでもありますよね。特にビスラーク、彼の最高順位は……10位ですか」

「そうなると一緒にジャンプアップするチャンスですよね」

「そうですね。実質ここからチャンピオンを目指すのは難しいですが、いいパフォーマンス、期待できると思いますよ」

そしてレースは最終ラップへと突入していく。

2位と大きく差が開いたチエートは、安全に第1コーナーを曲がっていった。

それとは対象的に、激しく曲がっていったのはジョッシュとビス

ラークだ。

最終ラップということもあり、ビスラークは強烈なブレーキングでジョツシュをパスしていった。

しかしジョツシュも負けじと食らいつき、その後の第3コーナーでビスラークをパスしていった。

その際に、ビスラークのマシンが大きくふれ、少し差がついてしまった。

そう、タイヤが厳しくなってきたのだ。

ビスラークはどちらかというと、追いつけてきたライダーだったので、タイヤの消耗もジョツシュより激しかった。

そしてそこからは何の変動もなくレースが終わっていく。

「さあ優勝はチエート、今シーズン2勝目です！ 2位にジョツシュ、3位に初表彰台、ビスラークです」

ポイントリーダーが転倒して波乱をよんだオランダGPは終了した。

だが……

#### 第44話 復帰とルーキー（後書き）

次話はオランダGPのバルクフェルメでのお話なのですが、来週は休載いたします。

というのも、その日の金曜日はテスト当日なのです。ご迷惑をおかけします、申し訳ございません。

## 第45話 ワノマールの秘密(前書き)

時間が少し出来たので短いですが更新出来ました。  
どうぞ。

## 第45話 ワノマールの秘密

オランダGPはチエートの優勝で幕を閉じた。またもや雨での優勝となったチエートは、ランキング3位につけ、いい感じでバスタージたちに追いついてくれた。

ジョッシュというルーキーも、今シーズン3度目の表彰台を獲得し、ルーキーにしては十分な成績を残した。

復活したビスラークも、いい走りを見せて渾身の3位。これからのレースに期待となった。

クデューリは結局17位。ワノマールは18位だった。ポイント  
は獲得できなかった。

そしてイタリア国歌がアッセンサーキットに鳴り響き、125C  
Cの決勝、表彰式は幕を閉じた……

\*

その後のブルーレッドのピットでの様子。飛翔がワノマールのところへと行き、しっかりと彼を見て話した。

「ワノマール、どうしてクデューリを抜かなかったんだ？」

「……………」

「お前のペースなら簡単に抜けて、優勝も狙えたはずだった」

「途中でタイヤの調子がおかしくなって……………」

「嘘つくんじゃないよ!!」

飛翔は机を叩き、メカニックたちの注目が飛翔たちを集まる。

「ピットで中継を見てた限りでは、タイヤにトラブルなんてなかった。フィーリングも十分に見えた。お前本当にチャンピオンになる気あるのか!？」

「飛翔、そこまでだ」

そう言ってやってきたキュレリーが飛翔を止めた。とても深刻そうな目つきで飛翔を見てから、同じ表情でワノマールを見て言う。

「ワノマール、ゆっくり休んで来い」

「……ありがとうございます」

そう言ってワノマールはとぼとぼと奥に進んでいった。

「……そろそろ話す必要があるかな、お前にも」

「はい？」

「ワノマールは……脅迫されてるんだ」

「脅迫!?!」

## 第45話 ワノマールの秘密（後書き）

次話、脅迫されているとは？

第46話 脅迫の真実（前書き）

なんかいきなりありえない話に……  
温かい目で見てください。

## 第46話 脅迫の真実

ワノマールが脅迫されているという衝撃の事実を知った飛翔。

「脅迫されているってどういうことですか!？」

「……もう隠してもしようがないか。知りたくないかもしれないが、脅迫しているのはローストチームだ。そう、お前が前にいたチームだ」

「え……」

飛翔は2011年にローストチームというところから2戦だけ参戦した。フル参戦の予定だったのだが、金銭問題で解雇になった。クデューリがスポンサーを持ち込んでチームに入れるように要求してきた。それに彼らはのつたのだ。

金があるほうを選ばれたのは正直、嫌で、信じられなかった飛翔だったが、とても優しく、しっかり働いてくれるいいメカニックたちだった。

そんな人たちが脅迫しているなんて余計に信じられなかった。

「話を続けるぞ」

そう言ってキュレリーは続きを話し始めた。

「お前、去年のドイツGPは見たか？」

「はい、見ました」

去年のドイツGPはワノマールが初優勝を成し遂げたレースだった。それも、クデューリとの接戦で打ち勝ったレースだったのだ。

「それが原因でこうなってしまっている。おそらくローストチームのメカニックは本望じゃないだろうな。あいつらのバイクの金は、全面的にクデューリの財産だから、バイクやレース、それら全てをクデューリに従わなければならなかったのだ」

「……………」

「クデューリだが、これまた曲者くせものでな。国や世界、全てを通して大きな権利を持っている。大人気おとなげないが、はっきり言って性格が悪い」

「本当に曲者ですね……」

「それで、ワノマールの優勝に腹が立ったクデューリは、ワノマールを事故に巻き込んだ。ワノマールはそれでシーズン中の復帰を断念した。そしてクデューリからこう脅迫されているんだ」

『今度お前が優勝したら殺す』

確かにワノマールはその後GPに出なかった。  
ずっとリハビリしていたのだ。

「はつきり言っちゃ追い出したいけどな。あんな奴、GPにいらない。純粋にレースを楽しむ場だからな」

そのとき、飛翔は考えた。

助けられないかな？

あいつはいつも笑顔で俺に接してくれた。ずっと前から恐怖に怯えていたのに、笑顔で振舞って。我慢して。精神的に助けてもらって。

そうしてオランダGPは終了して、イギリスGPが開幕する……

第46話 脅迫の真実（後書き）

次話、イギリス開幕！

## 第47話 イギリスのルーキー（前書き）

遅れてすみません！

今日、ちやちやっと手直ししてから投稿しようと思ったら、しばらくベッドで寝てしまいました。

それから起きたら妹にパソコン占領され……

これからはもっと早く書きます。

ご迷惑をおかけしてすみませんでした。

## 第47話 イギリスのルーキー

舞台はイギリスに移り、シルバーストーンサーキットにやってきた。

UBKが開催されるサーキットの中で最も距離が長く、有名な3連続高速コーナーもある。

そんなシルバーストーンに今年もUBKがやってきた。

\*

今から予選が始まる。

このコースは全長が6kmほどあるので、長く走るのが最大の鍵となる。

ブルーレッドチームでは、キュレリーがそのことについて話していた。

「このサーキットはすごく長いからな。しっかり走りこんでタイム出すように」

その言葉の元、飛翔たちはサーキットへ出走した。

一方、バンクハースパーチーム。

「どのチームもこう言うと思うが、走りこむことだ。行ってこい！」  
「はい！」

3人もサーキットへと出走していった。

\*

予選が始まると、最初から勢いよくとばしていったのはルーキー、ジヨツシュだった。

ジヨツシュは地元レースだということもあり、とてもサーキット

を知っていて、なおかつ得意なサーキット、数々の応援があるので、とてもはりきっていた。

序盤からトップを快走するジョッシュに追いつける者はおらず、そのまま予選は終了した。

〈最終予選結果〉

- 1 ジョッシュ
- 2 飛翔
- 3 バステージ
- 4 ビスラーク
- 5 チェート
- 6 クデューリ
- 7 ワノマール

\*

その日のホテルにて。

マルティーニがジョッシュの部屋に入り、次の日の決勝レースについて話していた。

「ジョッシュ、お前は期待のルーキーだ。それに張り切るのも分かるが、転倒だけはするなよ」

「ええ、絶対転倒せずに勝ちます」

「そうじゃなくてだ。勝てなくても、イギリス国民はお前の走りが見れるだけで幸せということを忘れるな」

「分かっていますって！ 俺の走りです！」

(全く分かっているじゃないか……)

不安になりながら、マルティーニは部屋へ戻っていった。

そして決勝の日が訪れる……

第47話 イギリスのルーキー（後書き）

次話、決勝スタートです！

## 第48話 ルーキーの思惑(前書き)

ジヨツシユメインのお話って絶対に「ルーキー」がつかますね。

## 第48話 ルーキーの思惑

「さあ決勝日を迎えました！ 第8戦イギリスGP。解説はいつものとおり、坂谷さんです。よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします」

「さあこのイギリスGP、ポールポジションを獲得したのはルーキーのジュシーニ＝ジョッシュとなりました。地元ですから張り切っているのでしょうか？」

「それは張り切るでしょうね。ここまで期待されているルーキーですから。地元で初優勝だつて考えられますからね」

「日本の新垣飛翔も自己最高位タイの2番手からスタートです」

ライダーたちはグリッドにつき、レースの開始を待っていた。天気は雲一つない晴天。

そしてウォームアップラップを済ませ、レースが開始する。

「2012年UBK125ccクラス、第8戦イギリスGP……スタートですっ！！」

シグナルが黒になり、ライダーたちは一斉に飛び出していく。

一番早く飛び出したのは飛翔。2番手にジョッシュと、飛翔が1歩リードした形でレーススタートとなった。

レースはしばらくの間順位は変わらずに続いていく。飛翔、ジョッシュ、バスタージ、ビスラーク、チェートの5人でのトップ争いとなっていた。

バスタージ、ビスラーク、チェートの3人は何回か順位を入れ替

えているのだが、トップの飛翔とジョツシユは変わらずに走っていた。

3番手争いが激しく順位を入れ替えているため、飛翔とジョツシユは集団から抜け出し、2人でのトップ争いとなった。

そう、ジョツシユはこの展開を待っていたのである。

自分が前に出ても飛翔やバスタージといったトップライダーは振り切れない。だったら前に出た飛翔について引いて引き離してもらおう。レースを荒らさなければタイヤの消耗も激しくならない。これまではジョツシユの思惑どおりにレースは動いていた。

一方6位争いはクデューリとワノマールという、この頃因縁がある対決。

しかしこのレースもワノマールは前に出ることができず、ずっとクデューリの後ろに付いていた。

トップから離れてしまい、3位表彰台争いとなったバスタージ、ビスラーク、チエートの戦いは誰も一步も引かず、激戦区となっていた。

どんどん激化していくイギリスGP。レースは中盤へ。

## 第48話 ルーキーの思惑（後書き）

次話、レース中盤。激しくなっていくレースに新たな展開はあるのか……？

## 第49話 予選越えの争い

かなりの混戦となっているイギリスGP。

トップ争いは飛翔と地元のルーキージョツシユ。3位表彰台争いにバスタージ、ビスラーク、チエート。

5人のトップ争いから2人のトップ争いへと変わったトップ集団。ここしばらくは飛翔がトップを走り続け、ジョツシユが後ろから様子を見ていた。

その争いも、ここでようやく動きが見えた。

(さうて、そろそろいくか)

ジョツシユはそう思い、バックストレートエンドで飛翔をパスしていった。うまくスリップストリームにつけて、綺麗にパスした。

(さう、ここから引き離すぞ！)

ジョツシユは逃げる体勢をとり、ペースを上げていった。

一方3位争い。

3位を走行していたバスタージがペースを上げ始め、徐々にビスラークとチエートを離していった。

4位走行のビスラークはペースが上がらなくなり、バスタージに離されていくばかりだった。

その後ろを走っていたチエートはまだタイヤが温存されているので、充分バスタージに追いつけるポテンシャルを維持していた。

そしてチエートはバスタージから3位表彰台を奪うために、ビスラークのスリップについた。

「さあ、チエートがスリップについて、ビスラークをパスしていき  
ました。坂谷さん、ビスラークのペースは上がっていないですね」  
「そうですね。あの争いで一番動きが見えたのはビスラークでした  
から、タイヤがもうあまり残っていないかもしれないかもしれません」  
「逆にバスタージ、チエートの2人は残っていると」  
「どちらかというと彼らは荒らされた側ですから。うまくかわして  
いければ飛翔とジョツシュについていけたかもしれませんがからね」  
「さあ、レースはまもなく後半。新垣飛翔はジョツシュに打つ勝つ  
ことができるでしょうか」

そのトップ争い。

ジョツシュは飛翔を引き離しにかかったが、飛翔は難なくついて  
きている。それどころか、あっさり抜かされそうだ。

(な……なんで追いかけてこれるんだ?)

ジョツシュもそれに驚いていた。

ジョツシュの今のペースは予選よりも速いタイムで走っている。  
つまりは、予選の時の誰よりも速く走っている。そのペースに飛翔  
がついてきている。ジョツシュにとっては想定外だった。

そしてレースは終盤へ……

第49話 予選越えの争い(後書き)

次話、イギリスGP決着！

第50話 トミコのプレミアム（前書き）

50話達成！

これからもよろしく願いします！

## 第50話 トップのプレッシャー

レースは終盤。中盤から順位は変わっておらず、そのままレースは動いていた。

ジョツシユと飛翔がトップ争いを繰り広げる中、余裕があるはずのジョツシユのほうに焦りが見えた。

理由はというと予選を超えるタイムを出しているのだが飛翔が普通に追いかけてきているということだ。

サーキットにはレコードラインという走りやすいラインがタイヤの跡で見える。焦っているジョツシユはレコードラインを外して走ってしまっている。そうすると著しくタイヤは消耗されていく。本当に余裕がなくなっているのはジョツシユのほうだった。

(くそ！ ペースが上がらない！)

ジョツシユも自分でペースが上がらないことに気づいていた。

「新垣のほうがペースいいですね、坂谷さん」

「ジョツシユはタイヤが使い物にならなくなり、ペースが落ちていくのでしょうね」

するとラストラップ手前のバックストレートでスリップストリームにつき、前に出た。綺麗なブレーキングだった。

そこから飛翔はペースを上げ始め、少しではあるがジョツシユを引き離してフィニッシュへ向かった。

一方3位争いはバスタージとチェートの争い。チームメイト同士で激しいバトルを繰り広げていた。

現在はバスタージが3位でチェートが4位を走行している。

その戦いもラストラップへ突入し、チェートが激しくプッシュし始めた。

争いはフィニッシュラインまで分からなかった。

そして1番初めにフィニッシュラインにやってきたのは飛翔だった。

「新垣飛翔、今季3勝目です！ 2位にジョツシユ、激戦の末、3位はチェートの逆転。バスタージは完走したレースでは初めて表彰台を逃しました」

こうしてイギリスGPは幕を閉じた。

そのころのバンクハースパーチームピット。マルティーニがジョツシユを呼び出し、話し始めた。

「どうだった？ 今日のレース」

「信じられませんよ……なんで僕のペースについてこれたのか……」  
「トップを引つ張るのは簡単そうに見えて難しい。目の前にライダーがいるとタイヤの消耗も抑えられるし、ペースも上げやすい。それに比べてトップは自分でペースを作り上げ、プレッシャーにも堪えなければならぬ」

「……………」

「まあ、お前はこれからだ。いい経験になっただろう？」

「はい」

また1つ学んだルーキー。これからのレースに活かせるか？

第50話 トットのプレミアシヤ（後書き）

次話、ドイツへ！

FP描写から入ります！

## 第51話 ドイツGP開催

第8戦の舞台はドイツ・ザクセンリンクサーキット。毎年天候が不安定だが、今年は快晴。絶好のコンディションとなった。

今はFP（練習走行）のセッション。序盤からタイムを出し続けているのはやはりワノマール。

地元のレースで張り切っているのもある。それ以上に小さい頃から走りなれているこのサーキット。去年、ワノマールがルーキーとしてUBKに出場したときは、世界中を驚かせた。期待されていないライダーが、グランツやバスタージといった強豪を引き離しての優勝したのだ。

そのことから分かるように、ワノマールにとってここは大好きで、特別なサーキットだった。

サーキットレコードというそのサーキットでのベストタイムの保持者でもある。

一方で飛翔は苦しんでいた。

このサーキットは左コーナーが連続して続き、どうしても左のタイヤが右のタイヤより削れてしまうため、バランスが悪くなってしまう。

飛翔は現在7番手タイム。今季ワーストとっていいほどにペースが上がっていなかった。

「セッティングがよくないか？」

「いえ、大丈夫です。僕がコツを掴めていないだけで……」  
ジュイラーズが飛翔の所に駆け寄り、そう言った。

するとワノマールがピットインしてきて、新たなセッティングを試みていた。

その後もワノマールはファステストを連発し、他ライダーを引き離していく。

〜FP最終結果〜

- 1 ワノマール
- 2 クデューリ
- 3 バスタージ
- 4 チエート
- 5 ビスラーク
- 6 ジヨツシユ
- 7 飛翔……

その日の夜、飛翔はホテルで同じ部屋にいるワノマールにコツを聞いた。

「なあ、何かコツとかあるのか？」

「ん〜、特に意識していることはないけど……単発でタイムを出すなら左タイヤを思いっきり使っちゃったらどうかかな？ 飛翔君はどうしてもマネージメントする走りをしちゃうから」

「なるほどな。……で、決勝の時はどうすればいい？」

「いつもどおりに走ればいい。飛翔君のマネージメント力は凄いからね。それとあのコーナーは……」

その後も何度かコツを聞いた。早く実践してみたくなり、飛翔はうずうずしながら眠りについた……

翌日、FP3のセッションの時間がやってくる。

コースに出ると、早速昨日教えてもらったコツを実践してみた。

(下りのコーナーこそ、アタックのチャンス……)

飛翔は意識しながら走り続けた。

するとバスタージを追い抜く3番手タイムに進出し、自己ベストラップを刻んだ。

一方、チームは2位のライダーの存在が気になるようだ。

「クデューリか……」

以前から問題となっているクデューリ。ワノマールの最大の敵は生憎、彼となりそうだ。

そして予選へ……

## 第51話 ドイツGP開催（後書き）

ここで重要なお知らせです。

UBKをしばらく休載とします。

理由はといたしますと、作者の受験が間近に迫り、勉強に集中したいためです。

ご迷惑をおかけしますことをお詫び申し上げます。

再開は3月の下旬くらいを予定しています。そのころには作者の受験も終わっているでしょうし。

終わり次第、すぐに予約掲載いたします。

## 第52話 ハプニングと恐怖

波乱の予感がするドイツ・ザクセンリンクGP。そのグランプリも予選を迎え、各ライダーが走り出していった。

予選では、誰にも邪魔をされずに走れている、クリアラップというものがある。ワノマールはうまくクリアラップをとり、練習走行のような走りを見せていた。先ほどからトップを独占している。

一方で2位は飛翔。今シーズン初のブルーレッドチームのトップ2が期待されていた。

3番手にはクデューリがつけている。

ワノマールに教えてもらった走行方法を、予選でも飛翔はそのまま活用し、いいタイムを出していた。

しかし、闇は突然に広がります

まだまだ予選の序盤。その時にローストチームのクデューリがピットに入り、チームメカニックと話している。

「クデューリさん。このままタイムを出していけば2番手タイムは出せますよ!」

「このまま……出していけば?」

「ええ、そうです」

「そんなぬるいことできるかよ」

「え……」

「俺に従え。誰のおかげでいいバイク作れてると思ってるんだ」

「……それで、作戦とは?」

クデューリは作戦をメカニックに伝えた。それはとても恐ろしく、

やりたくない方法だった。それも、飛翔の元メカニックにとっては

そしてクデューリはタイミングを計ってピットから出た。ついた場所は、飛翔の真後ろである。

そして、作戦を決行した。

下りのコーナーで、クデューリは飛翔の後ろにぴったりつけ、今にも抜きそうな雰囲気を出している。次の8コーナーでクデューリは抜きにかかる。

しかし、そこでクデューリはミスをした。

意図的なミスを

「あああああああつと！ クデューリのミスに巻き込まれ、新垣が転倒してしまつたあああ！」

実況者がそう叫んだ。

マシンが宙を舞い、大きく大破する。飛翔自身はそこまで大きな怪我はせず、大丈夫だった。

その様子をモニターで見ていたキュレリーたちは、ただただ驚いた。しかし、取り乱すことはなく、冷静に状況を考えた。

飛翔に大きな怪我はなかったものの、マシンが大きく壊れてしまっている。そう、普通に考えると、予選中の復活は不可能である。このままタイムが更新できないまま、予選が終了していく。

そうになると、クデューリどころか、バスタージ、チェート、ジョッシュュ、もっと下位のライダーにまで抜かれてしまう。

そしてそれが現実となつて返つてきた。

〈予選最終結果〉

- 1、ワノマール
- 2、クデューリ
- 3、バスタージ
- 4、チエート
- 5、ジヨツシュ
- 6、ビスラーク …… 24、飛翔

その夜、ワノマールはジュイラーズに呼び出され、ドイツのカフエにやってきていた。

「すまないなワノマール」

「いえ、別にいいですよ」

「ちよつとお願ひしたいことがあつてな……」

「お願い？」

「明日のレース……勝て」

「……………」

ジュイラーズはテーブルを見ながらそう言った。

ワノマールもまた、テーブルを見ながらその言葉を心に染み込ませた。

抜けないワノマールが狙うのは、スタートからクデューリの前に出る。せつかくのポールポジションスタートを無駄にせず、ただ勝利を狙う。一番単純で、難しい方法だった。

明日のレースは、勝ちにいく。何も怖れずに

## 第52話 ハプニングと恐怖（後書き）

お知らせ

このUBKを不定期更新に戻したいと思います。

といつても、受験やらで更新は遅くなると思いますが……

不定期更新に戻すお知らせでした。

次話は決勝レースです。

## 第53話 笑顔と過去

決勝日。予選と変わらず晴天に恵まれ、完全なドライコンディションでレースを迎えそうになった。

決勝レースの前には40分ほどのウォームアップ走行があるのだが、そこでもトップタイムやはりワノマール。2位にはクデュリーがつけ、予選は24位だったものの飛翔は3番手タイムを刻んだ。今はウォームアップ走行が終了し、あと2時間くらいで決勝レースという時間だった。飛翔たちブルーレッドチームは、ワノマールが大好きなお店に連れて行ってもらい、食事を摂っていた。

いかにもヨーロッパ、といった感じのおしゃれな店だ。ドイツ語は喋れない飛翔なので、ジュイラーズやワノマールに頼んで注文した。

普通に楽しい時間にも見えるが、飛翔にはどうもワノマールが不安そうな顔をしている。

理由は紛れもない脅迫のことなのだろうが、飛翔はどうしても彼を救いたいという気持ちがあった。

以前から脅迫されていたにも関わらず、飛翔に迷惑をかけないよう、不安にさせないよう、必死で隠して笑って過ごしていた。これほど辛いことはないだろう、と、飛翔は思う。正直に、飛翔はチームメイトがワノマールだったからこそ、楽しく笑って過ごせている。そう思っていた。

今度はワノマールに本当の笑顔を取り戻すために、飛翔が不安を取り除こうと思ったのだ。

そしてみんなは食事を終え、再びサーキットへと向かっていった。

決勝レースの準備が進められている中、ピットで飛翔とワノマール

ルはテレビゲームをしていた。飛翔が「サーキット覚えられねえ！」  
というと、ワノマールが、「じゃあUBKゲームやろうよ」と提案  
し、プレイしていた。

たまたま去年のゲームが発売されており、飛翔はローストの飛翔、  
ワノマールは戦闘力のなかったブルーレッドのワノマールを選択し、  
レースを展開していた。

サーキットを覚えるためにゲームをするも、ワノマールはゲーム  
でもザクセンリンクだけは速かった。

プレイし終わり、飛翔はずっと聞きたかったことを聞いた。

「なあ、ワノマール」

「ん？ どうしたの？」

「……今日のレース、勝ちにいくのか？」

「……………」

その質問に、ワノマールは表情を曇らせた。いきなりそんなこと  
を聞かれるとは思ってもいなかったのだろう。

ワノマールは表情を変えないまま、答えた。

「取りに……いきたい」

しかし、希望する形で。

するとワノマールはスツと顔を上げ、飛翔のほうを見て言った。

「……もう話した方がいいよね？ 僕の過去」

「辛いと思うが……そうしてほしい」

ワノマールはゆっくりと瞬きをし、話し始めた。

僕は、ドイツの小さな農業の家に生まれた。

初めは親に農家を継ぐように、そう言われてきた。僕も嫌気があ  
るわけではなく、その通りにするつもりだった。でも、人生が変わる  
出来事があったんだ。

たまたま家の近くにあったザクセンリンクサーキットに、僕はよく遊びに行っていた。いつも聞こえるエンジン音に惹かれたんだ。隣には大きな観覧車があつて、それに良く乗ってバイクを見てた。だけどある日、バイクに乗りたいと思うような出来事があつた。それは1997年のザクセンリンクGP。いつもどおり見に行こうと思つたら、大行列ができてた。一体何なんだ!? と、驚いた。大行列の理由は、僕がいつも観覧車から見ていたUBK。「将来必ずスターになるやつが出てきた!」「あいつは金の卵だ!」と、観客はあるライダーに惹かれていた。

それは、現UBKの世界チャンピオンであり、UBKの大スター、バレンティン・グライビッチ。

まだルーキーにも関わらず、争っている場所はチャンピオン。初めからマシンに恵まれていたとはいえ、ルーキーではなかなか出来ないことだ。年齢はまだ16歳。そのころ僕はまだ3歳。

そのころから、親にバイクに乗りたい! って言うようになった。初めは普通にやらせてくれた。でも、僕の家は小さい農家。すぐに資金問題でダメになった。

そんな時に声をかけてくれたのが、ジュイラーズさんだった。お前の才能を捨てるのはもったいないって。ジュイラーズさんは、資金を全面的に援助すると言ってきた。ある条件を満たせば。

その条件は、

『勝つこと』

それから、ジュイラーズさんが元々勤めていたブルーレッドに引き入れられ、今年で二年目

「……ということなんだ」

「そこで、ドイツGPで勝ったことに、クデューリが怒りを表し、脅迫事件が発生したと」

「特にあのレースは、いつも前に出ない僕というライダーが出たから、クデューリは表彰台に上がれなかった。あのクデューリがほっておくわけないよ」

ワノマールはまた俯いて言う。そして、こう言った。

「僕に勝つ資格はないんだ」

「そんなことない！」

飛翔が大声を上げる。それにワノマールは驚いて、目をパチクリさせながら飛翔を見る。

「勝つてはいけないライダーなんていない！ 誰もが優勝を狙うからUBKはおもしろいんじゃないか！」

「でも……」

「お前みたいな速いライダーが負けるわけねえだろ！」

その言葉がピットに響いた。

するとキュレリーが二人を「時間だ」と言って呼び、レース開始のスターティンググリッドへついた……

### 第53話 笑顔と過去（後書き）

次回こそ決勝レースです。前回の予告とそれて申し訳ありません！

## 第54話 前の栄光

「皆さんこんにちは！ 実況の寺野です！ 第9戦の舞台はここ、ザクセンリンクサーキット！ 昨年のワノマールの劇的な優勝から早1年。今シーズン勝利がないワノマールはたして勝てるのでしょうか!?」

各ライダーがグリッドについている。

ウォームアップラップを終え、レースがスタートする。

「今年も中盤戦。第9戦ザクセンリンクGP125ccの決勝！  
今スタートです！」

シグナルが黒色になり、各ライダーが一斉に飛び出す。

ブルーレッドの作戦では、ここからワノマール独走を始める……  
はずだったのだが。

ロケットスタートを決めた2番グリッドのクデューリが前に出てしまう。2位にワノマールがつけ、バスタージやチェートと続く。

一方の飛翔は、スタートでうまく飛び出し、21番手につけていた。

その様子はもちろんピットでも映し出される。

「ど……どうしましょう……クデューリが前に出てしまいましたよ」  
新人メカニックのアゴスターが慌てている。

ワノマールは脅迫の影響で、初めから一回も抜かないレースを約束されている。それも、前にいるのは脅迫を行っている張本人、クデューリ。地元2連覇は絶望的となった。

しかし、今回のレースはクデューリが速さを持っている。クデューリについていっていると、次第にバスタージが離れていった。クデューリはこのサーキットが相当得意なようだ。

これでトップ争いはクデューリとワノマールの一騎打ち。3位表彰台争いにはバスタージ、チェート、ジョッシュのバンクハーアスパー3人。飛翔はオーブニングラップを終えたときには15位につけていた。

序盤から中盤にかけて、クデューリはタイヤのライフを考えずに走り、どんどんバスタージたちを離していった。ワノマールは何の問題もなく、クデューリについていつている。

走っている間に、ワノマールは考え込んだ。

……このペース、僕だったら簡単に引き離せる。……でもっ！

また、事故の記憶がよみがえる。そう、あの意図的な事故。

何度も抜こうかな、抜こうかな、と思う。でも、抜けない。恐怖という敵がワノマールに襲い掛かってくる。

そんな恐怖の中で、ワノマールは、ただただクデューリの後をつけた……

一方で飛翔は12位まで上がっていた。

トップライダーが下位から上がってくるのには、結構なラップ数が必要となる。

ペースが明らかに違うライダーがトップライダーから離されてしまい、それを抜いてから、再びトップライダーを追っていかなくてはならない。

飛翔の今のペースは、予選よりはかなり上がって、クデューリより少し速いペースで走れている。もちろん、タイヤも意識しながら。飛翔は、今は前を見て進んでいた。ゆっくり、着実に。

そして、ワノマールは動くことなく、後半へとレースは展開していく

第54話 前の栄光（後書き）

次回、終盤！

ワノマールは動くのか……！？

## 第55話 優勝は0.1秒前

レースの三分の二が過ぎたところで、ようやく動きが見えた。

24番グリッドからスタートした飛翔が、怒涛の快進撃でバスタージの集団、つまり表彰台争いに加わったのだ。飛翔は現在ジョッシュの後ろ、6番手を走っている。

しかし、飛翔はこんなところで挫けなかった。いや、目標ではなかった。今のペースは無理なく作れたペース。このまま行くと、最終ラップくらいにはクデューリに追いつける。

その考えが飛翔の頭で計算されていた。しかし、レースにも集中しているという、聖徳太子みたいなことをやっていた。

そして、トップ争いに加わり、ワノマールと戦う。そう思いながら、飛翔はバンクハーアスパーとの戦いを始めた

僕はどうすればいいんだっ………！

そんな心中のワノマールは、ずっと変わらず2番手を走っている。目の前にトップがいるにも関わらず。

ザクセンリンク全てが恐怖に見える。

勝ちたいではなく、勝てる。そのレースで勝てない。

色んなことがワノマールを押しつぶそうとしてきた。

ワノマールはどうしようもなく、まだクデューリについていった。クデューリのペースが落ちているにも関わらず………

そのころ飛翔はバスタージを抜いて三番手に上がっていた。バスタージもチャンピオン争いをしている飛翔に食らいつこうとするが、バスタージでも対応できないほどに飛翔のペースは速かった。

そして、ついにはワノマールの姿が見えるまで追いついてきた。これは飛翔のペースが上がっているのもあるが、クデューリのペースが落ちているのもある。バスタージたちもじわじわではあるが、クデューリたちとの差を縮めていたところだ。それから飛翔は、予定通りに残り2周でほぼ追いついた。そこから最終ラップに締めくくる準備を整える。

「ど……どうするんですか!? もうあと2周ですよ!?!」

ピットではアゴスターが慌てていた。それに対してキュレリーとジュイラーズは何も言わずにモニターを見ていた。

するとキュレリーが、ジュイラーズに向かって言った。

「ジュイラーズ。最後のワノマールへのピット指示はお前がしろ」提案ではなく、命令で。何が何でもそうしろ、とそう言った。

ジュイラーズは黙って頷いて、ピットボードに手書きの型をはめていく。

思いが届け、とでも言わんばかりに。

ワノマールはラスト2周目もクデューリの後ろ。更には後ろから飛翔が追いついている状況。

ワノマールは更に追い詰められてしまった。

地元で3位でも表彰台に昇れるのは嬉しいことだ。しかし、目の前にトップがいるのに勝てないのは、この上ないほど悔しい。

どうしたら……

その狭間でワノマールはホームストレートへと帰ってきた。

そして、最後のピット指示を見る。

それを見てワノマールは驚いた。

ジュイラーズが出した指示　というよりはメッセージに思えた。

『+0.1』

これは、ただクデューリとの差が0.1秒というだけだ。ただそれだけ。しかし、ワノマールはこう考えた。

優勝は0.1秒前

それから色々なことが頭に浮かんでくる。そして一番上に出てきた言葉が……勝つことが条件。

ワノマールは無意識にアクセルを全開し、しっかりとブレーキレバーを構えた……

第55話 優勝は0.1秒前(後書き)

次回、ドイツGP決着!

勝利は果たして誰の手に……!?

第56話 ここでは英雄だった(前書き)

ザクセンリンク終了！ いや〜長かったな〜(僕の更新が遅いから)

## 第56話 ここでは英雄だった

急なブレーキングの第一コーナーを、決死のブレーキングで、ワノマールは曲がった。なぜなら……

勝ちたいから！

優勝はたった0.1秒前にある。呼吸を一回するかしないかからの距離。

ザクセンリンクでは負け知らずのワノマールがついにトップへと……

「ついに！ 地元ザクセンリンクでワノマールがトップに躍り出ました！」

実況が大声で叫ぶ。その声はザクセンリンク中に響き渡った。それからしばらくすると、大歓声が実況よりもすごい勢いで響き渡る。予想外の行動にクデューリは動揺を隠せなかった。

ここでワノマールに前へ出られると、追いつけるはずがなかった。タイヤのライフも、もうない。そんな状態でワノマールに勝てるはずがない。だったら……

転倒へと追い込むだけだ。

そういう考えがクデューリの脳内で働く。しかしその瞬間

クデューリの体がコースの外へとはじき出される。大きくハイサイドを起こし、クデューリは大きな転倒を喫ってしまった。

「くそっ……！」

その様子を見たキュレリーはこう言った。

「UBKでの0.1秒はどれほどにも遠く感じる。しかし、どれほ

どもにも近く感じる。遠く感じたのはクデューリ。近く感じたのはワノマールだ。そして、レースの事、つまり、前のライダーのアクシデントを考えたとき……そのライダーのレースは終了だ」  
クデューリは追突という強硬手段に出ようとしたばかりに、ハイサイドを起こして転倒。集中力を切らしてしまった。

そしてレースは、初のチームメイト争い、ワノマールVS飛翔というバトルが展開されていた。

『やっとお前と本当の勝負が出来るんだな……絶対勝つ！』

『勝てるもんなら勝ってみなよ』

そう言わんばかりの攻防が続く。いや、攻攻といったほうが正しいのかもしれない。

ワノマールはとても攻撃的なラインを走る。誰もに通らないようなライン、しかし速く走れるライン。大好きで大得意で馴染みのあるサーキットでは、紛れもなくワノマールは無敵だった。

追いつけない……！

まるで飛んでいるかの様にワノマールは飛翔から逃げていった。飛翔やバスタージといったどんなトップライダーでも、このサーキットでは霞んでしまう存在だ。

なぜなら、ワノマールが存在するから。

綺麗に最終コーナーを立ち上がり、ホームストレートへと帰ってきた。

「第9戦ドイツGP、優勝はワノマール！ 今シーズン初優勝！  
そしてザクセンリンク2連覇！」

その後、飛翔が2位でゴール。3位にはバスタージが表彰台に昇り、ザクセンリンクでのレースは幕を閉じた。

第56話 ここでは英雄だった（後書き）

次回はザクセンリンクのエピソード的な？  
その次はイタリア開幕です！

第57話 追放(前書き)

ドイツGP終了です

## 第57話 追放

歓喜に溢れる中、ローストチームピットに帰って来たクデューリ。鈍く黒いヘルメットを取り、そのまま地面に叩き付けた。

「くそっ……くそっ！」

今シーズン初表彰台の前に、初優勝も見えていたレースなだけに、悔しさを表すクデューリ。いや、怒りなのかもしれない。

絶対に抜くはずのなかったワノマールが最終ラップで抜き去り優勝。おまけに自分は転倒リタイヤ。

「相手が悪かったただけだ。気にするな」

そうメカニックが言いに行く。しかし、当のクデューリはそんなことを気にしていない。

「あいつ……決して前のライダーを抜くなと言ったはずなのに……」  
クデューリの脳内は破壊で埋め尽くされていた。

あの忌々しき事故が、意図的な事故が蘇る

表彰台の真ん中にドイツ国旗が上がり、ドイツ国歌がザクセンリンクに響き渡った。

ワノマールは目を閉じ、静かに国歌を聴いた。

僕はやったんだ……もう、後には退けない。でも戦う。そう決心した。

ワノマールはスッと空を見た。

綺麗な青色が広がる。空もワノマールの勝利を喜んでいるようだった。

こうして、ドイツGPは幕を閉じた……

「今……なんて……」

ローストチームのピット。クデューリが恐ろしい提案をし、チームメカニックがただ驚いていた。

「言ったとおりだ。ワノマールを怪我させて出場できなくさせてやる」

また、クデューリは意図的な事故を起こすようだ。

「……もう、やめにしませんか？」

「何!？」

メカニックが放った言葉にクデューリは表情をしかめた。

「……あなたみたいなライダーは、UBKに必要な」

強い心を持つてメカニックはそう言った。金で雇われているなど関係ない。こんな奴をUBKに置いておくわけには行かないのだ。

「てめー……お前がどういう立場か分かってるのか!？」

クデューリは我を失っている。ただただ、叫び続ける。ワノマールの破壊しか頭にない。ほかの事などどうでもいいのだ。

すると、ローストチームのピットに一人の男性が入ってきた。

「そのメカニックの言うとおりだ」

その男はUBKの最高責任者、エミル・ディレイだ。

「お前の悪事をずっと見逃していたが……もうそういうわけにもいかない。レースを去ってもらう」

クデューリの雇っている軍隊によってどうすることも出来なかった運営だが、ワノマールの強い決心に心をうたれたのか、やっと動き出した。

これにより、クデューリは警察に捕まり、ワノマールは本当に自由の身となった。

標識が終わった後、ローストチームのメカニック、エンジンニア  
ーがやってきて、ワノマールと飛翔の前で頭を下げた。

「すまなかった。俺が弱いばかりにここまで悪事が長引いてしまっ  
て」

「いえ、そんな……」

ワノマールは慌てて両手を前に出した。

「それと……飛翔」

「何ですか？」

「……すまなかったな。金なんか操られてお前を捨ててしまって。  
バイクレースはマシンで決まらない。紛れもないヒューマンスポー  
ツなのに」

そう言ってエンジは踵を返した。

「俺たちはまた一からやり直した。飛翔、ワノマール、いいシーズ  
ンをな」

そう言ってエンジはサーキットを去った。

大波乱のドイツGPは今度こそ、本当の終わりを迎えたのだった。

## 第57話 追放（後書き）

ここでちょうど折り返し地点です。

長い……非常に長い……

！ 次回はイタリア！ チェートのイタリア！ よろしくお願いします

## 第58話 イタリアの大スター

舞台はイタリア。シーズンも第10戦を迎えた。

サーキットはムジエロ。特徴は何といても1kmを超えるホームストレート。カタールのロサイルサーキットほどは最後のストレートで抜けることはないが、差によっては十分抜ける。

そんなイタリアムジエロで125cc予選が始まるうとしていた。飛翔とワノマールはサーキットに飛び出していき、予選を開始した。

全長が5kmほどあり、いつもより走れる周回が少なくなるのも特徴のうちだ。

そんなムジエロでいい調子なのはチエートだ。

地元サーキットという事もあり、張り切りと共に得意もあるのだろう。また、かなり昔からバイクレースが親しまれているイタリアだけあって、ここ最近イタリアの期待の新人が出ていなかった現状に、チエートにかなりの人気と期待が集まっている。

それにつられて、バスタージやジョッシュといったバンクハリアスパイ勢もタイムが上がってきている。

飛翔とワノマールのブルーレッド勢もペースが悪いわけではなく、バスタージたちと目まぐるしく順位を入れ替えている。

そして予選が終了した。

〈最終予選結果〉

1 チエート

2 バスタージ

3 ワノマール

4 飛翔

5 ジョッシュ  
6 ビスラー

125ccクラスの予選が終了し、最高峰のMotoGPクラスが始まると同時に大きな歓声が無数に響き渡った

「……やっぱすごいな」  
「そうだね……」

飛翔とワノマルも予想していた事態に少し苦笑いを浮かべる。この歓声はMotoGPクラスの大スター、バレンティン・グライピッチに向けられているものだ。その最高峰クラスで9回もの世界タイトルを手に行っている、いわば絶対王者。そのグライピッチの地元がこのイタリアなため、毎年大歓声に覆われるのだ。

そしてグライピッチはここムジエロを9連覇している。このグライピッチを見るたび、飛翔はずっと思ってしまう。

いつかこんな風になりたい。

誰よりも速い。必要な要素、速さを持ったライダー。

それに憧れた日から、飛翔は最高峰クラス進出を目指している。

そのためにも、明日開催されるムジエロは勝たなくてはいけない……。

飛翔は明日勝てるように、ポイントリーダーの位置を維持できるように誓い、眠りについた

第58話 イタリアの大スター（後書き）

おお……やっと10戦。

今年もよろしくおねがいます^^

第59話 イタリアのストレート(前書き)

今回は特別短いです。  
すみません。

## 第59話 イタリアのストレート

「さあ！ 始まりました！ 第10戦イタリアGP。125ccにとってはサマーブレイク前ラストのレースになります。一体どんなレースになるんでしょうか？ 解説は坂谷さんです」

「よろしく願います」

「さあ坂谷さん。前戦でついに新垣飛翔がポイントリーダーに躍り出ました」

「そうですね。このところ流れも非常にいいですし、このレースにも期待したいです。ただ、バスタージとの差は1ポイントしかありませんから油断は出来ません」

「決勝レースは間もなくスタートです」

舞台はムジエロサーキット。昔からレースに親しみがあるイタリアでのレースとなる。

ポールポジションは地元GPのチエート。やはり親しみのあるサーキットはやりやすいようだ。

各ライダーがウォーミングアップを終え、レースの始まりを待った。

「さあ全員グリッドに着きました！ 2012年125cc、第10戦イタリアGP、スタートです！」

シグナルが真っ黒になり、各ライダー一斉に飛び出していった。スタートではバスタージが一気にチエートを抜き去り、トップで第1コーナーを旋回していった。それにチエート、飛翔、ワノマルと、グリッドはかなり入れ替わってのスタートとなった。

バスタージはチエートからタイムが特別遅れているわけでもないので、ワノマル以降はあっさりと離す事に成功した。

レースは5周が終了し、トップ争いはバスタージ、チエート、飛翔、ワノマールの4人。

5位争いにジョツシユとビスラーク、ファスシーニという順になっている。

トップ集団はスタート時から全く誰も動かない。それもそのはず。ついていける限り前に出ないのは当たり前だ。ましてや、独走できる状態も揃っていない。

そんな状況の中、最終ストレートにやってきたのだが、何とこんなタイムニングで仕掛けたライダーがいた。

チエートだ。

チエートはバスタージのスリップストリームにつき、ストレートで横に並び、ブレーキングでバスタージをパスしていく。

それにあわせてブルーレッドの2人やバスタージはチエートの前に出ようとした。この中で一番独走できる確率が高いのはチエートだからだ。

そうして大波乱のレースは終盤へ

第59話 イタリアのストレート（後書き）

次回決着です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4280q/>

---

UBK ~ 最速に惚れた男達 ~ 125ccへの道

2012年1月6日17時48分発行